
風の錬金術師

最焉 終

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風の錬金術師

【Nコード】

N4896X

【作者名】

最焉 終

【あらすじ】

突然だった。小説によくある感じの死に方だった。というかまさか僕のように普通でそこらへんにいる高校生の人生が何も成さずに終わっていくとは思ってもよらなかった。いや、何も成さずなどとおこがましい事など言ってはならないのかも知れない。そのような人間はごろごろといるだろう。

事故、事件、自殺、病氣、寿命・・・はないかもしれないかな。将来に何かを成すであろう人間がいたかも知れない。だが、そのような事例も『しょうがなかった』のかもしれない。

―――
せいで

―――運命などと呼ばれるクソったれなモノの

※初投稿です。100%趣味で執筆していますので、感想などは受け付けておりません。あしからず。

第0話 死（前書き）

はじめまして。

駄文ですが読んでもらえたら幸いです。

いかんせん初めてなのでどのような感想を抱かれるかは分かりませんがあらすじにも書いた通り感想等は受け付けておりません。

プロローグ 第0話 死 です。

どうぞ。

第0話 死

ピピピ ピピピ ピピピ ピピピ ピピピ ピピピカチャ

タイマーうるさいな。何でこんなにうるさいんだ。僕を起こすためか。

そんなことのためにわざわざ6時にそんな騒音を鳴らすのか。ご苦労なこった。そんな仕事やめちまえ。あはははは。

「・・・いかん、まだボーっとしてるな。さっさと顔を洗うか」

そう呟き一階へ下りる。僕の家は二階建てなのだ。

顔を洗い頭を起動させると鏡に向かって、

「おはよう」

なんて喋ってみる。自分でも馬鹿らしいとは思うがこれも日課になりつつある。・・・大丈夫かな、僕。

「お腹減ったな。・・・朝飯」

家に親はいない。死んだ・・・訳ではない。何かしら仕事があるらしい。

何かは知らないが、知ろうとはしたが親に聞いてもはぐらかされてしまった。それ以来聞いたことがない。だから朝も夜も休日の昼のご飯は一人つきりだ。最後に見たのは・・・3カ月ほど前かな。元気にしてるかな。

連絡は時々くるんだが。

「いただきます」

これも習慣だ。家が静かで自分以外に人がいないからかな。寂しく感じてしまう。だが、もう慣れてしまった。今じゃあこれが普通だとも思える。

「ごちそうさま」

言うまでもなくこれも習慣だ。

~~~~~

制服に着替えて家を出る。向かうはもちろん学校だ。制服に着替えて向かう場所など決まりきっている。・・・例外はあるだろうが。

「いってきます」

挨拶は大事だ。

学校に着いた。教室に入るともう半数ほどの生徒がいた。他クラスにいる人もいるんだろうなとか思いながら誰が入ってきたかを確認する視線を流しながら席に向かう。当然、話しかけてくる友達などいるはずもない。

つくろうなどとも思わないが。

しばらくして名前も覚えていない担任が入ってくると連絡事項を告げてさっさと出て行ってしまった。当たり前だ、授業があるのだから。

## 1時間目現代社会

通称現社。なんて呼びやすい通称だろうか。現社と言う言葉の響きは嫌いじゃない。現社の授業自体は嫌いだけど。

## 2時間目英語

詳しく言うのとイギリス語。嫌いだ。僕は即効で寝た。

## 3時間目国語

好きでも嫌いでもない。つまり何も言うことはない。普通に受けた。

## 4時間目数学

1番好きな科目だ。公式とその応用を知っていればたいいの問題は楽勝だ。教科書を読んでいる問題は問題ないと思われる。

## 昼休み・昼食

体育がある日と日直の日以外で僕が席を立つことはあまりない、皆無とさえ言える。そんな僕が売店に行くなどありえないし（弁当を持参）友達と机をくっつけて一緒に食えることもない（これは言うまでも無く友達などいないから）しかし近くで見せびらかすかのような動きで（動かしている本人はそんなことは思っていない）くっつけようとしている。殺したいほど妬ましい。

## 5時間目化学

化学と科学の違いは何？・・・なんだろう。気になる。

6時間目・・・は無い。月曜日は5時間授業でそのまま担任が来てさようならとなる。なんて優しい学校なんだ。ほかの学校ではこうはいか無いだろう（憶測）

部活にはもはや言う必要も無かろうと思われるが当然入っていない。いつてきますと言ったならこの言葉を言うのは当然と言える。

「ただいま」

と。

~~~~~

学校から帰っても何もすることは無い。宿題も無いし、テレビでも見るか。

カチツ　ワーワーワーワーワーワーワー・・・

野球は好きじゃない。

カチツ　ワイワイキャツキャ

教育番組・・・あのアルファベット3文字は出しちゃだめだな、変えよう。

その後もチャンネルを回してみるが面白いものは無かった。

どうしようか。家にパソコンはおろかゲームさえない。金が無いわけではない。逆に結構あるほうだ。自分で稼いだお金ではないが。親が通帳に振り込んでくれているのだ。なんて優しい両親だ。

今の当たり前は中学に入ってからだった。いや、時々いなくなったりし始めたのは小学四年になってからだったか。そのころから部活には入ってはいなかった。面倒くさかったわけじゃあなかった。じゃあ何故かって？

答えは単純明快”おもしろくなさそうだったから”だ。きめ付けだ。これほど単純な答えなどあるまい。

「おっと、もうこんなじかんか・・・」

お風呂に入らなくては。え？晩飯はどうしたんだって？そんなものはとくに済ませたさ！まあ、僕はそこまで食べるほうじゃないから昨日の残りを温めて食べただけなんだけどね。

お風呂に入った。お風呂ほど快適なものはないね。・・・自分だけ

かな。

僕は早寝早起きだからさっさと寝てしまう。

部活をやってないと便利だな。自由時間がいっぱいだ。筋トレなんかしてないし、頭もそこまで良いとは言い難いので自分の将来について人生というものについて深く考えたことは無い。考えるだけ無駄ってやつさ。

心残りがあるとすれば、お母さんとお父さんの仕事が何なのか分からなかったことぐらいか。

急に眠くなってきたな。これまでの人生でこれほど眠いと思ったことは無い。僕はすぐに眠った。

今日の1日も何かが起こったわけでもないし宇宙からの家出少女が来たわけでもなければ黒い死装束を着た死神が出たわけでもでかい悪霊が出たわけでもないし緑色の侵略者が来たわけでも無くましてや自分が死ぬなんてことも起こりえたりもしなかった。

第0話 死（後書き）

サブタイトルに『死』って書いてるくせに主人公らしき人物死んで無いじゃん！とか

長っ！と思った人ごめんなさい。ちゃんと転生までいきたいと思ひます。

次は 第0話 夢 になると思われます。

ここまで読んでいただき本当にありがとうございます。

第0話 夢（前書き）

このような小説に興味を持ってくださってありがとうございます。
チラッと見てくれただけでもうれしいです。

僕の気が向いたら更新されるかもしれません。

第0話 夢 どうぞ。

[illegible]

まるで僕が本来繰り返すはずだった月曜日のようにではないか。

それは無い。絶対に無い。もうあんな毎日を暮らすことは無い。この命に誓って言える。・・・？

ああ、しまった。命に誓うことはもうできなかったな。自覚しているはずなのになぜこうまで現実味が無いんだろう。

僕が日曜日に死んでしまっているという事実。

でもその日は別にいつもどりの休日だったはずだよなあ。

いつもどおり昼に起きて適当に昼飯を食べて午後にはDVD観賞と洒落込んでて・・・。

夜中になったのも忘れるほど没頭していて気がついたらもう午後八時だったんだよなあ。

また適当に晩飯食べて風呂に入って髪を乾かしてさあ、寝ようかなって時に胸が痛み出したんだっけ。

そういえばまだあのDVDの最後の場面見てないよ。ま、いか。いまさら悔やんでも遅いし。

あーあ。人生の最後があの日だって分かってたなら告白の1つでもしてたっていうのに。

まあ、別に特別好きな人がいるってわけでもないんだけどね。

~~~~~

さて、さっきから僕は辺り一面真っ白な空間に漂っている。今自分が立っているのか分からない。

分からないから漂っている、と表現したんだが・・・どうなるんだろう、僕。

死んだら天国なり地獄なり逝ったりするんだろうけど、本当に天国や地獄があるのかどうかは知らないし、何より僕は今漂っているからどうしようもないんだよな。

ていうかまずこの空間自体はなんだろう。

天国かな。真っ白だし。でも僕のイメージだところ、いっぱいいる天使がわーわーってなってるんじゃないのかな。うーん、本当にここはどこなんだろう。

さらに疑問があるのが、この『体』なんだよね。僕って死んだはずなんだけど指で触った感覚があるっていうのはどういうことなんだろう。疑問に疑問が重なる。

よし、今の状況を整理しよう。今、僕は空間に漂っていて動くことができない。そしてその空間というのが辺り一面真っ白な『世界』。一番の疑問が僕は死んだはずなのに『体』があるということだ。

心臓は当然動いてはいない。当たり前だ。僕は死んだんだからな。

・・・？

やっぱりだ。なぜ僕はこうも平然としていられるんだ？

まるで僕が生きてさえおらず死んでさえいないしそもそも僕は元から生まれてさえいないみたいだ。

~~~~~

ここまで来て気持ちの整理が済んだ所で最大級の問題に取り組もうじゃないか。

今の今まで意識外に押し出していたが『あれ』に立ち向かわなくてはすべては謎のままだろう。

そう、今の今まで意識外に押し出していたと言った『あれ』

『あれ』はまさに漫画『鋼の錬金術師』に出てくる真理の扉とやらのそっくりだ。

まさに漫画という世界から飛び出てきたかのような現実感の無さだ。認めたくは無かった。『ああいうもの』は現実に存在しない。

それこそまさにあの『世界』の真理だったはずだ。

認めたくは無かったが認めたくはあった。

さらにもう1つ真理の扉にはセットで付いてくるあの『存在』がいるはずだ。

僕の目の前には真理の扉がある。

すると振り返れば当然のごとくまるで最初からいたように、昔ながらの友達のようにこう言った。

『つづ』

と。

第0話 夢（後書き）

短いかな。

いやプロログとしては長いな。

2時間ぐらいで適当に執筆したので訳の分からない部分があるかもしれないけど、
しれませんでしたが大目に見ては・・・くれませんよね。

次話は 第0話 転 になると思われます。

ここまで読んでもらえてうれしいです。本当にありがとうございます。
しました。

第0話 会（前書き）

実は今テスト2日目です。

テストは諦めた。

そして前回の次回予告的なものを裏切ったみたいですみません。
そのことについてあとがきでちょっと・・・。

第0話 会 です。どうぞ。

第0話 会

いた。

『奴』だ。

どうやら本格的に『奴』に話を聞かなければいけないようだ。僕の疑問を晴らすためにも。

『初めまして・・・というべきかな？そして予想通りの結果にがっかりしているのかな？まあ、君が思っているであろう事は大体はあつてと思うよ。ここは“鋼の錬金術の世界”の真理の扉のある空間を元に再現している。君との交渉を手早く済ませるためだけに創ったんだぜ。感謝しろよな。君に対する説明を円滑に進めるために作ったとも言える。今の君の疑問も大体想像できるよ。

“なぜ自分は死んだのか”

そして“死んだはずなのに自分の体がこの空間にあるのか”

さらに“体に触ったという感覚があるのか”

さらにさらにそんな状況下であるというのに“なぜ自分は平然としていられるのか”

君の疑問はその四つのはずだ。』

なんだ『こいつ』は。まるで僕の心を覗き見たかのように的確に突いてくる。

それに原作で『こいつ』はここまで喋ったっけ？

・・・いや例は1つしかないから決め付けはよくないよね。うん。

「それで『きみ』はいつたい“何”なんなの？」

『フツ。お決まりのあの言葉を言って欲しいのかい？ いいだろう。全身全霊を持ってして言わせてもらおうよ。ごっほん。』

オレは君達が“世界”と呼ぶ存在

あるいは“宇宙”

あるいは“神”

あるいは“真理”

あるいは“全”

あるいは“一”

だが、オレは君ではない。』

「え・・・？」

原作では『そして、オレは“おまえ”だ』なんてことを言っていたはずなんだけど・・・。

しかし・・・そうか。“原作では”か。なるほど。じゃあこの空間

は本当に説明のためだけにこの空間を創った訳であって本質はまた別物ってわけなのか。

『オレが君でない理由。それは単純なほど簡単だ。君が・・・君であるからだ。』

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

こういう時ってどういう反応を取ればいいんだろう。まさかボケてわけじゃないよね。こんなシリ阿斯なときに自分から雰囲気ぶち壊す奴なんていないって。ありえないよ、ありえない。

『言っておくが別にボケたわけじゃないからな。そのままの事を言っただけだぜ？オレは。』

僕が僕であるから『奴』は僕じゃない。それが指す意味は・・・

「つまり地球という名の“世界”の僕という存在をそのまま魂ごとここに持ってきたって事？それも僕が死んだ瞬間に。」

『そのとーりーり！だから君は体を触った時に触ったという感覚が表れるのさ。』

「だけど・・・なんで？」

『じゃないと世界が滅びるのさ。』

説明を要求する。話がぶっ飛びすぎ。

『ああ、すまない。説明を端折り過ぎたな。だが、説明するのも一

苦勞だな。うーむ。そうだな、
君の究極的な疑問“なぜ自分はこの状況下で平然としていられるのか”というものがあったな。』

「それが、どう関係するのさ。」

『つまり、君は死ぬはずではなかった。いや、それ以前に君は元々生まれるはずでもなかったんだ。』

「え・・・？」

『だから君が生まれるという事実本当は“運命”には無かったんだ。もちろん生まれるはずではなかったんだから死ぬはずではなかったというのは当然のことだ。』

「運・・・命。だけど、生まれるはずではなかったというのならこの僕の記憶にあるお父さんとお母さんの存在はどうなるんだ？僕がそんな存在ならお父さんとお母さんは何者なの？」

『お父さんとお母さん？お前に父親、母親がいるわけがないだろう。生まれるはずがなかったんだから産む存在がいるわけがない。』

「だけど、生まれるはずではなかったと言うのなら僕は地球と言う“世界”に生まれたという証明になるはずだよ。」

『確かに証明にはなる。が、証明になるのであれば君が生まれるはずではなかったという証明にもなる。なにより生まれるはずではなかったというのに生まれてしまったから今こうやって話し合っているんだ。それに君は父親と母親がいることを記憶として知っているようだが何を根拠に言ってるんだ？

会話をしたことがあるから？通帳に金が振り込まれていたから？その存在を見たことがあるから？

そしてそれすべてが記憶として存在しているから？』

「そうだよ。僕にはそんな記憶がある。だから僕にお父さんとお母さんはいたんだ。」

『・・・なぜ君は自分の記憶を疑うということを知らないんだ。

自分の記憶は虚構だと思うことができないんだ？いや、思っていないからそんなことを言うんだらう？

自分ではもはや気づいていたはずだ。確信していたはずだ。

この空間でオレと話していたときから。

否、この空間で漂っていたときから。

否否、地球という“世界”で暮らしていた時から君はもう気づいていたはずだ。違うか？』

その通りだった。たしかに気づいていた。

自分の記憶に3ヶ月前に“会話をした”というのはあった。

しかし、それ以前から不自然ではあった。

自分の暮らしが、自分自身が自然であるという事に普通であるという事自体が不自然だった。

なにより、頼ってきた記憶が小学校のときの記憶がまったくもって曖昧だった。

皆無だったといって良い。

小学校のときの記憶というのはあまり覚えてはいないものだけどころもなかったということほど不自然なものはない。

僕の“当たり前”は中学校からだ。つまりは・・・そういうことだ。

「やっぱり君の言うとおり僕に親はいなかった。そういうことなの？」

『そういうことなの。』

「そして、その原因が“運命”とか言う不確定要素なものなんだ・・・」

『君は運命というものを信じない方がいい？まあ、人それぞれだからな。押し付けてもしょうがない。だがしかしすべての物事に偶然などありはしない。すべてはそうであるように、そうであるために時は刻まれていく。それが“運命”というものだ。』

だが“運命”が君という存在を確立出来ていなかったために地球は破滅の道を進むことになる。』

「ど、どうして・・・？」

『人間の生命エネルギーというのは存外なまでに膨大だ。君という存在を確立出来ていなかったために君という存在の時間が刻まれていなかったのさ。そのため、君の・・・君であった時の生命エネルギー及び後世生命エネルギーが死亡と同時に噴出し始め膨張しいわゆるの爆弾へと変貌していくはずだったのさ。』

「もし僕という存在をこの場所に呼んでいなかったら地球はその頃どうなっていたの？」

『その時の生命エネルギーは計りしれないだったろうからなあ・・・地球の半分が消し飛んでいたのは間違いないだろうな。』

「う、嘘・・・。」

『嘘なもんかよ。僕が張ってなきゃ危なかったぜ？何せ後1秒遅か

ったらドカーカーカーカーカーカーカーンだったからな。』

「……。」

『やっと本題に入るぜ。そこでだな。お前転生してみる気は無いかな？』

「え？.？」

転……生……？

第0話 会（後書き）

長く感じられたので転生は次話になると思われます。
すみません。

次話こそ 第0話 転 になります。絶対にして見せます。
ここまで読んでくださってありがとうございます。

第0話 転（前書き）

早く転生させたいですね。

転生しても原作に介入するのは遅くなりそうですが。

そして今日はなんと投稿する時間が無かったという事態。
もう12時過ぎてる。

笑えない。

第0話 転 どうぞ。

第0話 転

「転・・・生？転生というと輪廻転生かな。なんで急にそんな話を持ち出したの？」

『さっきも言ったがここはオレが創った空間であってお前をここに置いてはおけない。君は輪廻転生と言ったが厳密には輪廻転生とは言えない。君はもはやいない存在だからな。』

「断ったら、どうなるの？」

『君が断るのであればその体は地球に戻すしかない。そうならば今度こそ地球は消えてなくなるだろう。』

「・・・もともと僕には選択肢はないんだね。」

『そのとおり。君が地球に住まう全人類を助けたいのであれば君に“断る”という選択肢は無く承諾するしかないわけだ。』

「だけど僕が転生などできるはずがないよ。前科があるからね。」

『・・・？前科？何を言っているんだ？』

「僕はいわば地球という国に不法入国したようなものだよね。だから僕はここにいます。」

『確かにその通りだが・・・。』

「だったら――――――――――」

『しかし別に君が地球に転生する必要はないぜ?』

「……え?」

『異世界転生、と呼ばれるものだ。知らないだろうから教えてやるけど君がこの空間に来たのはあの扉をくぐってきたからだぜ?』

まあ、それは想像はついていた。

当然だ。この空間の唯一の出入り口はあの扉だけだ。

『あの世界はどんな世界にも通じている。オレがそういう概念を与えたからだ。しかし、鋼の錬金術師という“世界”をモデルにした所為か今は(・・)その“世界”にしか通じていない。』

「今は(・・)なんだね……。」

『そう今は(・・)だ。それで?まだ明確な答えはもらってないな。どうするんだい?転生するか、しないか。まあ、答えは決まってるんだろうが。』

「……うん。転生する。いや、してあげる。地球の全人類の為に……だけど。」

『だけど?』

「僕がそんな“世界”に転生しても生きていけるかはわからないよ?何より転生した場所がどんなところになるかわからないよ?

それに僕には力なんて無いし転生したと同時に“僕”という確立した自己は消失するはずだよ。」

『それは無いな。言っただけだ。輪廻転生ではなく異世界転生だと。君は転生し君として生きていくんだ。そのためなら力だってあげちゃうぜ。というか忘れたのかい？君はあの扉から転生していく。そのうえあれは真理の扉だ。意味は分かるだろう？』

「つまり僕は転生したと同時に真理を手に入れることができるというわけだ。」

『そういうこと。だが・・・あまり手合わ錬成はしない方がいいだろうな。目をつけられる可能性が高い。』

そうか。あの世界の親玉は神を取り込むため真理を見た人間を人柱にしていたからね。

でも、それならどうせ異世界転生をするんだっただけ・・・。

「ねえ、僕からお願いがあるんだ。聞いてもらえる？」

『ああ、良いぜ。何でも言ってみな。出来る限りでな。』

「僕は・・・創造と生成の力が欲しいんだ。」

『それは・・・難しいな。それはもはや神の域だ。簡単なことじゃない。』

「いや違うんだ。僕が言いたいのはその世界に応じた創造と生成の力が欲しいんだ。そして僕は風の力が欲しいんだ。さながら錬金術師のように等価交換ということで僕のこの体をあげようじゃないか。僕にはもはや無縁の体だ。十数年共にしたんだけどね・・・。」

『なるほどそういうことか。・・・いいだろう。あげようじゃないか。君のその体をそのための等価交換としてもらっておくよ。もともと君の体は消えてなくなる予定だったんだがちょうど良い。』

「これで僕の体ともおさらばだね。存外に悲しいものだよ。」

『これで君が転生すれば君という自己は存在するが君がいるという証拠は消えて無くなるという事だ。そこでだ。ものは相談だが君の後世の名前を決めようじゃないか。』

「な、名前って。そこまで考えなくても・・・。大体名前というのは産まれて決まるものじゃないの？
ほらよく言うでしょ。子は親を選べないって。」

『しかし君が言った言葉だが転生した場所がどんな場所になるかわからないんだぜ？もしかしたらイシュバルとかいう殲滅される民族かもしれない。子は親を選べないだったか。だが、再三言ったはずだぜ？これはただの転生ではなく異世界転生だと。フツ、オレが君の親を選んでやるよ。』

だからせめて名前をかつこよくしようぜ。』

「でも、あの世界の名前は洋名だよね。僕が思うに和名を考えてからのほうがいいと思うけど。」

『和名からねえ。ならちよつとは中二臭くっても構いはしないよな。雷鳴轟、とかどうだ？』

「・・・それはない。それはないよ。それはないって。いやいや、ないない。ありえないって。今鳥肌立ったよ。びっくりした。勢いあまって死んじゃうところだった。・・・いやもう死んでるんだっ

[illegible]

『ど、どうした？ 今杳然として急に後ろ向いたとおもつたらう
ずくまっつてぶつぶつ言い始めて。』

そんなに今の名前よくなかったか？」

「うん
・
・
・
○」

やつと立ち直れたよ・・・。

『・・・なら、今の君の状況を名前にしようか。君の状況、それは・

未来が無く、過去さえ無く

未来があるから過去があり

過去があるから未来がある

だが、未来が無いから過去が無く

過去が無いから未来が無い

そんな名前。すなわち、過去も無く未来も無い

過ぎ去らず未だ来ることも無い

過去未来無 いや、過去未来奈すさみくな なんてどうだろう？
会心の出来だろう。 』

「中二臭い・・・けど、なんかかっこいいね。気に入ったよ。それ。それで？洋名は？」

『え？いや、過去未来奈を未来奈過去にしてそれを英語にするなり何なりしたら良いと思うよ。』

あ、オレのおすすめとしては未来奈はカタカナにしたほうがかっこいいと思うんだ。』

それはそれでアリだとして過去って英語でなんだろう。

僕の苦手科目だもんな。これだからイギリスは。↑（イギリスの皆さんごめんなさい。）

『過去は英語でpastだ。厳密に言えばthe pastだが、pastで良いはずだ。』

past・・・パスト・・・パステイック・・・とかみたいな感じかな。

「ミクナ・パステイック・・・パステイル・・・パステイラ・・・パステイシア・・・パステイクル・・・パステイクル・・・ミクナ・パステイクル・・・良いんじゃないかな。」

『決まったか？』

「うん。僕の名前は今からミクナ・パステイクルだ。」

『お、なかなか良いじゃないか。オレも気に入った。んじゃあ、名前も決まったしな。もうそろそろ行くか。』

「もう、か。君に会えなくなると思うと寂しいよ。」

『ん？別に会おうと思えばいつでも会えるぜ？』

「え？そうなの？」

『ああ。君が望む時間にまたここに呼んであげるよ。』

「・・・なら、原作が終わったらまた僕を呼んでくれる？」

『ああ、良いぜ。大歓迎だ。それじゃあ、またな。』

「うん。またね。」

それと同時に後ろの扉の開く音が聞こえる。

ゴゴゴゴゴゴゴッ

僕は後ろを向く。

「うわぁ・・・。」

目玉を見て、ここまで再現しなくても思いながらも扉に近づいていく。

闇に飲み込まれていく。『あいつ』を見て手を振ってやる。

『あいつ』も振り返ってくる。

そして、ついに、僕は、その空間から、姿を、消した。

第0話 転（後書き）

特に何も書くことはありません。

名前の事についてとかなに1つ書くことはありませんよ。

ただ1つ言える事は雷鳴轟なんて書いて後悔は少しだけあるっただけ。

そして今回は少し長めに執筆してしまいましたが転生までこぎつきたかったのが本音です。

次話は第1話 生 かな？

ここまで読んでいただきありがとうございました。

第1話 生（前書き）

テストが返ってくる・・・。

憂鬱です。

そんなものも吹き飛ばして執筆したいと思います。
（現実逃避とも言う）

第1話 生 です。どうぞ。

第1話 生

僕は親というものを知らない。

親というものが分からない。

記憶にあったものはすべて嘘だとあの空間で指摘された。

思い知らされた。

僕はあの世界に誕生することで親というものを知ることができるだろうか。

知ることができると願いたい。

~~~~~

僕は気がつけばなにやら液体に囲まれた場所にいた。

確かこれは僕の記憶が正しければ赤ちゃんが母親のお腹にいるときにだけ存在する、羊水と呼ばれる物ではないかな。

ということは今僕がいる場所はお母さんのお腹の中か。

なんだかどきどきするよ。僕は本当に真っ当に産まれてくることができるのか。

そう思っているといい感じに“僕”という自己が覚醒したのか、も

うすぐ僕は産まれるようだ。

辺りがなんだか蠢いている。

なんだか新鮮な感覚だ。それが当然か。

うわっ。眩しい。頭が出たのか。

そして、すぐに足も出てきて僕は産まれてきた。

産声というものを上げてみた。産声は赤ちゃんが元気だという証拠になるはずだ。

というより最初の呼吸というべきか。

それから、へその緒が切られ産湯に浸からせられて体を洗われてタオルで軽く拭かれるとそのままタオルを巻かれ僕を産んだと思わしき人物の横に寝かせられた。

それにしても今すんごい眠いよ。本能だろうか。

あー、意識が、飛、ぶ。

その瞬間、僕の耳が隣の人物の声を確かに聞き取った。

「生まれてきてくれてありがとう。」

という言葉。

## 第1話 生（後書き）

すいませんキリがいいのでここで切ります。

まあ、サブタイトルも“生”ですからね。

次話は第2話 親 になる可能性大です。

内容も読めてそうですね。

※第0話になってました。すいません。

短かったけれどここまで読んでくださってありがとうございます。

## 第2話 親（前書き）

久しぶりですね。

親にパソコンを没収されてたので更新できませんでした。

まあ、そこらへんの妬み恨みは置いて。

第2話 親 です。どうぞ。

## 第2話 親

僕が誕生して1年が経った。

その1年間は特に語る必要もなく何もする事がなかった。

ただ、男としての僕のプライドというものが悉く涙に溶けて消えていってしまった。

ただまあ、今はもうとくに離乳食にはなっではいるんだけどまだちょっとトイレに自分で行くことができない。なので今は立つためにがんばって練習中。

何かを目指して頑張るといというのがこんなにも楽しいものとは思わなかった。

練習のおかげか家の中で何かに？まらず立てる時間が長くなってきた。1秒位だけだけど。

でも歩ける程度までいけているからいいんだけど。

それでもハイハイの方が楽な気がして嫌だ。

それにしてもこの家のお母さんは活動的だ。

どうやら家の裏に畑があるようで僕が朝6時に起きた時にはもう畑仕事を始めている。

朝6時におきるのは前世の性か。



洗濯物をたたんであるところを見て床が綺麗なところを見るとすると5時には起きているのかな。

すごいよね。今は水をあげてるだけだけどたぶん鍬で全部耕したんじゃないかな。家の裏といってもそれなりに広いんだけど。前にやつとキッチンでテーブルに？まって窓から外を見ようとして見えなかったものだから仕方なく窓の枠に？まって外を見ると、何て言えбайいかな。

トマトやら大根やらほうれん草かな？がいっぱい埋まっていたり生っていたり水道の近くに洗うつもりなのかかごに入ってた。ついでといえぼなんだけどりんごの木も生ってるみたいだ。

すりつぶしてもらって食べていた時期もあったがあれは本当においしい。今はその時期じゃないから生ってはいない

あれ全部を1人で世話して収穫していると思うとびっくりしたね。うん。

どうやら収穫した野菜は町に売りに行っているらしい。時々それらを業者らしき人に頼んで運んでもらっていた。

そんな人物。今のこの世界でお母さんと呼ぶべき存在。名前を“リアラ・パステイクル”お父さんや親しい人はリア、と呼んでいるらしい。

しかも美人だ。そんな10人の男が10人全員振り返るぐらい美人とは言わないが半数は振り返るんじゃないかな。そんな人の子供として成長したとき鏡を見るのが楽しみだ。

片やお父さんのほうだがどうやら錬金術師らしい。1回だけドアが

開けっ放しだったので侵入してみたところそれらしき本が結構あった。

しかし、そんなお父さんだが国家錬金術師を目指しているのかなと思いきやそういうわけではないらしい。どのくらい能力があるのかは分からないが頭は良いみたいだ。錬金術師なわけだし。

というかあの人は基本引きこもりでいつも研究の部屋に閉じこまっている。若干怪しく感じないでもない。トイレの時とかにしか出てこない。ご飯は食べているようだが部屋の中で食べてるみたいだ。集中しすぎて時々食事を忘れていることも多い。

だが、別に人付き合いが悪いわけじゃないらしく知り合いもそれなりにいるようで物の修理を時々頼まれていたりするようだった。コミュニケーション能力が乏しいだけならしい。

僕が産まれて抱き上げてくれたことは1度も無かった。生まれてきたことに喜びはあったようだが。

そんな人物。今のこの世界でお父さんと呼ぶべき存在。名前を“リストレア・パステイクル”お母さんや親しい人はリスト、と呼んでいるらしい。

だが、正直言って何でこんな人とあんな人がくっつけたのかがよく分からない。お父さんは身長は高いが（170は絶対ある）ひよろって感じで研究ばかりしかしてないから体力なんかあるはずも無く、たぶん100メートルを走りきれないんじゃないか？と思うぐらい無いと思う。

僕も将来錬金術を勉強しようとは思うけど真理を見ちゃってるしね。手合わせ練成は出来るとは思うけど『奴』もああ言ってたしね。気

を付けないと。

・・・今思い出したんだけど今の僕は人間の生命エネルギーの塊のようなものだったはず。さらに賢者の石の材料は生きた人間。つまり僕は賢者の石そのもの？そう仮定するなら僕は・・・死なない？

## 第2話 親（後書き）

急展開になってしまった。どうしよう。

まあ、心配は要りません。

日常パートを書いてみせます。

期待はあまりしないようにしてください。

がっかりするだけです。

もともと期待する人がいるかどうか分かりませんが。

次話は第3話 喋 かもしれせん。

ここまで読んでいただきありがとうございました。

### 第3話 喋（前書き）

このごろ寒いです。

もうすぐ冬ですね。

そんなことより、

第3話 喋 です。どうぞ。

### 第3話 喋

戦慄したのは一瞬だった。

が、そこでさらに思い至った。

僕のこの世界から消えるのは“鋼の錬金術師”という物語が終局を迎えたことと同義であると。

しかも、再生は自動<sup>オート</sup>というわけでもないはず。

なにより怪我をしないように気を付ければいいんだ。

逆に生命エネルギーが減るのは都合がいいはずなんだ。

何も心配は要らない、と思う。

今の所は。

~~~~~

とか何とか結論付けて自己完結し終えたのは僕がもう1歳と半年になっ
てからだった。

すでにこのころの僕は1人で歩けるようにはなりトイレにも危なっ
かしくも1人で出来るようになった。

やっぱり僕という自己が存在している以上それは当然のことだ。

だが、1番の問題はここからだった。

言葉が分からないんだよね。

僕の英語の能力は最低ランク……。

理解できるはずがない。

絵本なんか読んで理解できるものがほとんど無かったんだ。

さすがに簡単な文字は読めたんだけどそこまでだった。

そんなんでお母さんお父さんの言葉も断片どころか端々も分からない。
い。

こういうところでは真理が役に立たないしね。

やはりアメストリス人が日本語なんか知っているはずも無いだろう
しアメストリス語がたぶん感覚で話してるんだと思う。

日常で僕や元の世界の日本人が違和感無く日本語を使うようにこの
世界のアメストリス人も違和感無く使っていることだろう。

さてここで本題に戻る。

僕がアメストリス語を使いこなすにはどうすればいいのか。

たぶんこのままでは僕は日本語しか喋れない精神異常者の目で見
られてしまう事になるかも……。

と、そんなことをお父さんの研究用の部屋で寝転がりながら考えていると（僕が静かだからなのかお父さんも気にしてない）ふと1冊の分厚い本が目についた。

『アメリストリス語辞典』

僕は戦慄した。戦慄というより驚愕した。

何でこんなものがこんなところにあるの？

アメリストリス人には必要ないはず。感覚で話しているんだから。

この世界で知られている他の国といえば“シン”という国しかないはず……。

漢文ならまだいけると思う。

やってみる価値あり。というかやるしかない。

僕はその本をお父さんの背中を見ながらこの体格ではとてつもなく重い本を抱えながら静かに退出する。

そして便宜上僕の部屋になった部屋に持ち込みノートとペンを持ってきて久しぶりの勉強を始めたのであった。

~~~~~

そしてまた半年後。



ついにこの時がやってきた。

僕の勉強の成果を。

お父さんとお母さんがいる部屋の前で少し緊張する僕。

そしてついに扉を開く。

お父さんが横目でこちらを見る。

お母さんが微笑を浮かべながらこちらを向く。

両方は当然話すことは出来ないだろうし言葉も理解出来ないだろうと踏んでいるはず。

（今まで“あうー”とか“だーだー”的なことしか発音してないし出来なかったわけで）

そこで口を開きたどたどしくも発音を正しく、叫ぶかのような僕の言葉。

聞いて驚け。

「おとうさん。おかあさん。」

僕は初めて、親を呼んだ。

### 第3話 喋（後書き）

僕は、頑張った。

疲れました。

もう寝ます。

次話は第4話 町 になると僕もうれしいんですけどね。  
ここまで読んで頂きありがとうございました。

## 第4話 町（前書き）

再来週の11月の終わりごろテストがあるんです。

更新が出来るかわかりません。

ちよつとやばいんですが・・・何とかなるはずですよ。

第4話 町 ですよ。どうぞ。

# 第4話 町

僕が声に出して喋ったという事実には最初はポカーンとしていたお母さんとお父さんだが最初に起動し始めたのはやっぱりというかなんと言うか、お母さんだった。

そして僕に抱きついて――

「ミックスナー——————！！」  
\* @, @ .. @ ; @ # \$ % & @ +  
\* ? ! \$ % # & @ ! ! 「

ちよ、ちよつと待つて。く、首が絞まつてるし早口で英語叫ばれてもミクナって呼んだのしか分からなかったしとにかく離れ——

~~~~~

僕が気が付くと一瞬ボーっとしてしまったけどすぐにソファの上で寝ていることに気が付いた。

「けど、だれもない・・・。」

時計を見るとどうやら30分も氣を失っていたらしい。

僕もまだ2歳になったばかりだけど大丈夫かなあ。

お父さんはどうせ研究室にこもってるんだろ。お母さんは……何してるかな。

とか何とかまだ寝転がったまま考えているとドアが開いた。

「あつ、ミクナ。やっと起きたあ。お母さん心配したんだからねえ。」

「・・・原因はお前じゃなかったか。」

と、お母さんとお父さんが何か話しながら入ってきた。

会話がそこまで早くないためそこそこ聞き取れる。

早口になるとさっぱりだけど。

僕の勉強法はとりあえず単語自体を覚えることだけで精一杯で会話などは出来る相手もいなかったから経験が少なくて着いていけない。前世でも海外旅行などしたことなかったしね。

「・・・今日は天気も良いから昼からでも買い物でもしてくるといい。・・・ミクナも初めて喋った事だしな。」

「うーん、そうね。今日の夜ご飯は豪勢にいきましょうか。ケーキも帰りに買ってきましょう。」

「・・・楽しみにしている。」

・・・？買い物に行くのかな？

それにしてもなんか嬉しそうだ。喋った事がそんなに嬉しかったのかな。

「・・・ミクナも一緒に連れて行くといい。・・・出かけるのは初めてだろう。」

「それいいわね。よし、それじゃあミクナ。お昼ご飯を食べたら町まで行くわよお！楽しみにしててね。」

と、そのまま鼻歌を歌いながらキッチンに向かうお母さん。

お父さんは僕の隣に座り近くにあった新聞を読み始めた。

・・・え？今、僕の記憶が正しければお父さんは一緒に言って来い的な事言ったよね。

・・・うわー、初めての町。しかも異世界。ちょっと興奮するなあ。

だけど、どんな町かも分からない。原作に出た町に行くとも限らないしなあ。

そうだ。気になるなら聞けばいいんだ。

「ねえ、お父さん。」

「！・・・なんだ。」

なんか今、すごい真顔で動揺した。

「お母さんが言う町の名前は？」

「・・・町の名前か。・・・この家のすぐ近くにある町は大きいとも言えない町だがよくさわやかな風が吹くんだ。・・・風がよく吹くことからその町は“ウイントスの町”と呼ばれているんだ。」

ウィン・・・トス。

~~~~~

その後、お昼ご飯を食べてお父さんの提案通り町に行くことになった。

どうやら徒歩で行くらしい。

ということはそこまで離れてはいない、ということになる。

と、そこで立ち止まり後ろを振り返ってみると・・・

結構大きな家があった。

そういえばこの家には階段があったなあ。

てことは2階があるはず。

今度行ってみよう。

とか何とか思っていると急に手を握られてびっくりした。

当然握ったのはお母さんだった。

「どうしたの？」

急に立ち止まって自分の家を見ていることを不思議に思ったのだろう。

「早く行こう？」

とそのまま手を握られたまま歩いていく。

が、

僕の現在の年齢は2才なわけで体格も小さくお母さんの半分ぐらいにしか頭が来ていない。

そんな身長で急に歩かれたら・・・

転ぶわけじゃない。

このお母さんが僕を引っ張った場合僕は引きずられて腕が！！

「痛い痛い！」

「ああ、ごめん！大丈夫？急に引っ張ったりして。」

いや、もう肩が外れそう。

というより僕は早く歩き始めたかった。

幸い、お母さんは気付かなかったからよかった。



あまりの痛さに僕は・・・日本語で叫んでしまったから。

~~~~~

そして無事に何事もなくウイントスの町に入ったわけだけど・・・。

精神年齢がもう18歳な僕に手をつないで歩くというのはなかなか恥ずかしいものがある。

だけど今の僕の姿は2才。

誕生日はどうやら秋の前世の世界の10月11月ぐらいになるらしい。

年数は・・・何年だろう。

この世界は大陸暦とか言う暦だったかな。

後でお父さんに教えてもらおう。

しかしこの町はそこそこ活気がある。

みんなが活き活きしてて毎日が楽しくてしょうがない、といった感じだ。

そんなにぎわった空間に入っていく僕たち。

実際問題野菜は自家栽培しているので野菜には困らない。

植えてないというより植えれない野菜や果物は買っているが。

後、お母さんが買うのは肉や服だ。

生憎、僕は特に服にはあまりこだわらない主義なので1週間2週間同じ服を着続けるのはざらだった。

なので僕は服を求めることはない。

お母さんが勝手に買っていくだけ。

それにしてもお母さんは知り合いが多い。

歩いてるだけで至る所から挨拶が来る。

時々お母さんが手を引いてる僕に対してそれっぽい感じに挨拶してくる。

だが、正直言って気持ち悪い。

おっさんが猫なで声出しても気持ち悪いだけだよね。

この町の住人は一体化してみんなで暮らしているといった感じに見える。

一致団結して今を生きるといった方がいいかもしれない。

今を生きて未来へと歩いていつている。

僕も今を生きる努力をしなくちゃ。

そのためにもまずはこの世界の常用語のマスターを目指さなければ・
・・！

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

家に帰り僕は少し疲れてのどが渴いたためキッチンに向かった。

と、そこでふとカレンダーを見つけた。

ちょうどいいと思い年を見た。

『1887年』

・・・え？

## 第4話 町（後書き）

やっと書き終わった。

もう寝ます。

おやすみなさい。

ちなみにウィントスは完全にオリジナルです。  
すいません。

次話は第5話 働 になるかもしれないです。はい。  
ここまで読んで頂きありがとうございました。

## 第5話 働（前書き）

更新をドンドンやっていきたいです。

まあ、毎日とはいきませんが。

第5話 働 です。どうぞ。

## 第5話 働

僕は鋼の錬金術師がそこそこ好きで1回だけ設定を見た事があった。

僕は記憶力にならそこそこ自身はある方だ。

今の僕の年齢2才。

現在の年は1887年。

つまり僕の誕生日は1885年。

そして僕が驚いた理由は。

とある登場人物と生まれた年が同じ。

それは・・・

焰の錬金術師    ロイ・マスタング

主人公と一緒にならまだ分かる。

意気投合もしやすいだろうし話しやすいかもしれない。

だけど原作開始時が28年後にもなる。

しかし今の僕は賢者の石そのもの言っても過言ではない存在だ。

いつから年をとらなくなるかは分からないけどもし、もし、僕がこ

の家に住んでいくとするのなら僕はこの家どころか町にすら、いることは許されることはないだろう。

~~~~~

そんな僕の将来が三十路決定した1年後。

特になんの代わり映えもしない毎日が過ぎていった。

あの後、僕は考えた。

後々に起こることに対応できる時間がたつぷりできた。

と、前向きな事を言うことで前進する事が出来た。

さらに将来を見据えるとなると錬金術の習得を早めなければ・・・。

そんな僕もいまや3才だ。

3才な僕が今やっていることはお母さんの畑仕事の手伝いだ。

なぜそんなことをしているのかというとただ単純に僕が暇だったのと少しでも筋力アップのほうも図っていききたいと思ったから。

実際は3才の僕には出来る事が少ないのだけどお小遣いも貰えるので一石二鳥だ。

さらに僕は町に行きいわゆるの商店街っぽいところで店を出しているおっちゃんたちのお手伝いをしている。

荷物運びを優先的にがんばっている。

日常的に体を鍛えてはいるがどうしても体が3才でしかないので肉体のスペックが悲しすぎる。

精進せねば。

と、そこである日突然お母さんが寝込んでしまった。

別に何か流行り病があつてそのままなすすべなく死んでしまうわけでもないし余命はあと1年ですとか医者に宣告された訳でもなくただ単なる風邪である。

明後日位には治るだろうとのことだった。

ただ熱は37度を超えているので結構きついと思うのだけどなんとベッドから降りようとするのだ。

ただどすぐにお父さんが起きようとするお母さんを寝させる。

「・・・起きるな。・・・今日はゆっくり寝ている。」

「でも、畑もあるし洗濯やご飯の用意もしないと・・・」

「・・・俺とミクナに任せておけ。・・・だから早く寝ろ。」

「そこまで言うならおとなしく素直に従うけど・・・本当に大丈夫なのよね？」

「・・・心配せずとも大丈夫だ。」

「うん、わかった。ごめんなさいね。おやすみ。」

「・・・おやすみ」

そしてお母さんはすぐに寝入ってしまった。

~~~~~

僕は初めに畑に水をやることから始めた。

これだけでも結構疲れるんだけど気にしない。

次に虫とか何とかを探しては引っぺがしてあっちこっちに投げる。

軍手をしているのでそこまで汚くない。

その次に収穫できそうな野菜を全部かごに入れていく。

しかしこの前も採っていったので熟れていたのはそんなに採れなかった。

そんなこんなで畑仕事をしていた時お父さんがこちらに向かってきた。

なんだろうと思っているとお父さんが

「・・・そろそろ昼だ。・・・ご飯を作ったから一旦休止して食べ

に來い。」

え……。なんですと。

「お父さんが……。作ったの？」

「……。そうだが……。何か文句でもあるか。」

ちょっと不機嫌そうになるお父さん。

意外そうに見られるのが嫌なんだろう。

「そんなわけではないよ。楽しみだよ。」

と言って農具を片付けキッチンに向かった。

するとそこには本当に意外なほどおいしそうな感じの料理があった。

そのまま席に着き恐る恐ると言った感じで小さな器に盛られたカレーと思わしき料理をスプーンですくい口に運ぶ。

パクッ もぐもぐもぐ

おいしかった。

お母さんと比べては失礼だが食べれないわけでもなく素直においしかった。

さっきからじーっと見てきて少し不安そうな表情を浮かべるお父さんに

「おいしいよ。」

と言うと

「・・・そうか。」

と言ったつきり黙って自分で作った料理を食べ始めた。

少し経って僕が食べ終わって畑仕事の続きをしにいかうと思いい外に向かおうとしたときにお父さんが唐突に僕に向かってこう言った。

「・・・ミクナ。・・・お前、錬金術に興味はないか？」

## 第5話 働（後書き）

シチューがあるならカレーもあるはず。

・・・急にすみません。

特に僕はあまりネタバレするつもりはありません。

次話の内容は当然決まっています。

次話は第6話 学 に決まりだ！

ここまで読んで頂きありがとうございました。

## 第6話 学（前書き）

このごろマインスーパーにはまってしまった。  
慣れてくると簡単になってくるものですねー。

第6話 学 です。どうぞ。

## 第6話 学

“錬金術”

それは目に見える事がない大きな流れつまりは世界や宇宙など呼ばれるもの、それを「全」とするならば

人間やそのほかの生き物の1人1人1匹1匹はその大きな流れに流され続ける「一」である。

つまり「全の中の一」

しかしその「全」も「一」が集まり集束し一緒に流され続けることで「全」という名の流れが存在する。

つまり「一の中の全」

この世界はともではないが考えられない法則により流され続けている。

その流れを知り理解し分解して再構築する。

それが“錬金術”

ただし僕がこの世界においてその流れに上手く流れているかは分からないけど。

~~~~~

唐突な話に戸惑う僕。

だが顔に出してはいけない。

3才かそこらへんの子供が錬金術だなんてものを知っている風な感じの感情は押しとどめておくに限る。

だから僕は至って自然に疑問を持つかのように答える。

「れんきんじゅつつてなあに？」

イントネーションをたどたどしくするのが大事だ。

「・・・ついて来い。」

そう言うものだからついて行くと着いたのはお父さんの研究室だった。

そのまま入っていくので一緒に入る。

相変わらず本があたりに散らばっている部屋だ。

片付けようとは・・・しないだろうね。

そんなことを思っているとお父さんが手招きするので机の側に寄り近くの木のいすによじ登ると何やら本を見ながら紙に何か書いているようだった。

覗き込んでみるとそこには・・・円がありその中に複雑な模様を書

くと次に文字を書き込んでいく。

そして書き終わったのかそのまま本を閉じこちらに目をチラッと見るとおもむろにポケットに手をつ突っ込むと僕を昼ご飯を食べるため呼びに来た時に拾っていたのか何やらちやうど今の僕の手の拳大の石を取り出すと練成陣と思われる陣の中心に置く。

そして陣に手を合わせると練成反応の光が発生した。

僕が初めて異世界の証拠（しかもファンタジー）の超常現象を見た瞬間だった。

練成反応が終わると練成陣を書いた紙の上には鉄のものと思われる光沢を持った物質と少し小さくなった石の2つがあった。

「すごい……。」

と、僕は素直に本音を言っていた。

当然と言える。

錬金術なんてものは前世の世界では地球がたとえひっくり返ろうとも回転軸が真っ直ぐになろうとも絶対にありえることではなかったから。

「……今のは石に含まれていた砂鉄をすべて分解しここに再構築した。」

とお父さんは言うが本心では「理解はできていないだろうが」とか思っているんだろうなあ。

当たり前だ。

お父さんから見て今の僕はただの3才のおとなし過ぎるといっていい子供だ。

だからこそ「興味はないか？」などと言ってきたのかもしれない。

興味？あるに決まっている。

超常現象、魔法、オカルトは男の夢だからね。

懂れるのも無理はない。もしかしたら僕だけかもしれないけど。

無意識に僕の目はキラキラ光っていたらしくお父さんは誰かに自慢するかのよう

「・・・さすが俺とリアの息子だ。」

と呟いた。

お父さんも夢だったのか・・・。

まあ、この世界でも錬金術師はそんなに多くはないらしいね。

そして僕がどうやって錬金術を学ぶかを思案していると

「・・・ミクナ、これを貸してやる。」

そう言ってさっき開いていた本を僕に渡してきた。

「え？」

僕は驚いた。

何故か？

言うまでもなく3才な僕に錬金術のことに關して師事することはないだろう、と思っていたからだ。

「・・・その本を読み続けろ。・・・1ページ1ページが擦り切れるほどまで読み続けろ。・・・そうすれば俺はお前に師事してやる。」

理解しているとは思ってもいないだろうから僕が本を受け取ったことで興味を持ってくれたとも思っているのだろう。

僕はお父さんのその思いに答えるつもりだ。

~~~~~

突然だが少し考えて欲しい。

今の僕の精神年齢は18歳だ。

そんな僕が男の夢と呼べるものの源を僕が手に入れて僕がただ読むだけで終わると思うだろうか。

答えは当然の如く否だ。

あの日から2日後お母さんが復活したところで僕はいつも通りの毎日に戻る。

いつもは町に行きおじちゃんたちの手伝いをするのだけど今日は休みだ。

すなわち今の僕は16時間の自由時間がある。

読書が趣味の僕にかかればどんなに分厚い本でも1日あれば読みきれれる。

だけど読みきれただけで完全な理解はしていない。

記憶力には定評のある僕にかかればある程度の単語は覚える事が出来る。

そこで僕は決して焦らず仕事が終わればすぐに家に帰り少しずつ理解を深めていった。

だが結果として1週間でそのすべてではないけど8割がたの理解は出来た。

18歳をなめるな（精神年齢）

だけど前述にあったとおりだし急せいては事ことを仕損しそんじる、なんて諺だつてあるわけだけど時間は決して無限ではなくこの世界では何が起るかは分からない。

ので、僕は基礎の8割がたの理解だけで次のステップに移ることに

した。

それはすなわち

“風”の理解だ。

## 第6話 学（後書き）

小説って本当に難しいですね。

実際にこの小説をどんな風に持っていくかも曖昧なわけです。

なのでそんな小説でも読んでくれる人に僕はとても感謝しています。

次話は第7話 研 なのかもしれません。

ここまで読んで頂きありがとうございました。

## 第7話 研（前書き）

なぜこうもほぼ毎日更新できているのか。

それは僕が暇人であり部活なんてもものに入っていないからです。

第7話 研 です。どうぞ。

## 第7話 研

風の理解を深める上でまず「空気」について考えた。

空気の大半の約8割を占める窒素、人やその他のあらゆる動物に不可欠なもので約2割になる酸素。

その他には微量過ぎてほとんどないにも等しい物質で二酸化炭素やたしかアルゴンとか言う物質も含んでいたはず。

けど、アルゴンはなんだったっけ。

光る物質だったかそんな事が書いてあったはず。

まあ、置いておく事にする。

他にもいろいろと含まれていたりするけどこれも置いておく。

例外として水蒸気も含まれていたりする。

だが、乾燥している空間では含まれない。

湿っている場所では存在するけど。

ともかく、それら諸々が集まって空気と呼ばれる。

通常、生き物は生活する上では気体であるため空気自体を意識したりすることはあまりない。

だけど、生きる上では欠かせないものだ。

同じように欠かせない水は常温で液体として存在するので生き物から意識されやすい。

しかし、それに流れがある時には意識されやすくなり“風”と呼ばれるようになる。

もちろん毎日風が吹いているわけでもなく無風の時だってある。

だけど人は一定の確率で風を感じる事がある。

人が歩けば近くの人も自分も少なからずそよ風を感じ人が走ればなびく風を感じる事だってできる。

つまり錬金術を使わずとも人が動きさえすればそこに風が発生し、何より流れが生まれることになる。

それが俗に言う人の流れじゃあないのかな。

ただ、人の動きにだって限界はある。

その限界を超えた風を錬金術により創り出すんだ。

~~~~~

というわけで一先ず僕は風の理解をする上でとても重要なことを思い出した。

練成陣なんて知っているわけもなくというか風の練成陣なんてものが存在するとも思えなかった。

ので、僕は1から考えてみてとりあえず書いてみることにした。

練成陣を創る上で大事なことは円と図形と文字だ。

そこらへんにあった縦横30cm位の紙を引っ張り出してきてまず紙いっぱい大きな円を書いた。

うーん・・・風は空気が流れることによって発生したものだ。

空気の成分は必要不可欠なものかな。

風の正体がどんなものであるかを書き図形を書こうかな。

図形が先かも・・・。

その前に空気の成分を調べてこないとなあ・・・。

そこで僕はお父さんの部屋に這入る。

いろんな本がありなおかつ散らばっているけど実は法則があった。

お父さんは生物の研究はしてこなかったらしくほんの奥底には生物に関する本がたくさんあった。

なので上のほうには物理的なものもあったけど化学の本もたくさんあった。

その中でようやく見つけたのが

「元素に関する身の回りにある物」

とかいう本だった。

なんのひねりもない素直な本で助かった感があったけど早く部屋に戻らなくてはならない。

そういえば2階の部屋はどうやら物置のようだった。

そんな僕の部屋は1階だ。

僕の部屋にたどり着くと真っ先にあの本を開き空気に関するものを探していき見つけるとそれを一先ずノートに書き写していった。

窒素、酸素、アルゴンと二酸化炭素にその他の物質を合わせて全部で16個の物質が辺りには微量ながらも散っているというわけだ。

だけどどんな風に練成陣を構築していけばいいんだろう。

空気の物質の量にも差はあるし。

その差を明確にしながら構築してみよう。

~~~~~

何とかできた。

試行錯誤の末にやっとだ。

それは手書きの上に丸なんて書き慣れてもないので少々形がいびつだ。

僕が創った練成陣は二重丸をつくり内側の丸を外側の丸に近づける。

そして丸と丸の間に窒素、酸素、アルゴン、二酸化炭素以外の物質の化学式を文字と文字の間が均等になるように書き入れる。

次に内側の丸の中に正方形を作りその中に今度はひし形をつくる。

その次に正方形の角に出来た隙間に窒素、酸素、アルゴン、二酸化炭素をそれぞれ書き入れる。

最後にひし形の真ん中に僕が頑張って製作した台風の形をした「風」という漢字を入れる。

これで完成だ。

はっきり言ってこれで発動しなかったらどうしよう的な感じはあるけどそれ以上に早く試してみたかった。

リバウンドは怖くない。

皮肉にも僕が傷つくことはないからね。

実際は再生するかどうかはコントロールできるわけだけど。

しなきゃ普通の子供じゃないしね。

とにかくすべては明日だ。

お母さんは町の友達の家遊びに行くらしいしね。

お父さんはいつも通り引きこもっているんだろうけど。

製作したその日に実験出来たらよかったんだけど何せもう夕日も水平線の向こうに消えていきそうになっているしね。

ああ、早く明日にならないかな？

## 第7話 研（後書き）

頑張って作ってみたオリジナルな練成陣。

ペイントも使って頑張りました。

試行錯誤に試行錯誤を重ねやっと完成してまだマシだと思えるものを・・・。

そういえば主人公設定とかいるかなあ。

原作が始まってからにしたいと思います。

次話は第8話 究 7と8で・・・。

ここまで読んで頂きありがとうございました。

## 第8話 究（前書き）

今日も今日とて最焉終了です。

この名前すごく打つのがめんどくさいです。

第8話 究 です。どうぞ。

## 第8話 究

今日やることにしていたお手製練成陣は置いておくことにした。

僕は練成陣を一先ず親の分からない様な場所に隠しておくとしてノートに空気の気圧の変化による影響やいろいろな公式を（お父さんの部屋から）本を漁って書き込んでいった。

漁るだけでは駄目なので一般的な空気の気圧の変動パターンを計算していき割り出す。

空気はもうひとつの言い方として大気という言い方もあるけど気圧に関する場合はそっちのほうが適切かもしれない。

気圧も大気圧って言うほうが正しいのかもしれない。

どっちも一緒だったはずだけどね。

なぜ気圧について論じるのかというと気圧はその名の通り空気の圧力だ。

この圧力は太陽などによる海上の水蒸気蒸発によって上昇気流が発生する。

圧力は上から押されることで発生する現象であり上昇するなら圧力は下がってしまう。

その下がった気圧を“低気圧”と呼ぶ。

更に気体といえども上昇するのに限界はあり上がったものは落ちてくる。

それが下降気流であり上から押さえつけるという現象が発生するため気圧は上がる。

その上がった気圧が“高気圧”と呼ばれる。

当然、気圧がその場で一定するはずもなく必ず高低が変わってくる。

そして気圧の差が生じることで押さえられていたものが解放されるように高気圧の空気が低気圧の領域に流れ込む事になる。その時に流れた空気が風の主な要因になっている。

と本に書いてあったからだ。

つまり錬金術により気圧を上げ下げすることで風を発生させあまつさえそれをコントロールしてみせる!!

というのが僕の魂胆だった。

~~~~~

という訳で僕が気圧と風の関係について調べた次の日。

僕の現在の所在地はなんと森の中だ。

森というより林かな。

いつものようにお母さんに町でお手伝いをしに行くとうそをついてここまでやってきた。

ここはウィントスより先にある林にやってきていた。

前にお母さんが近くに森とは呼べないがそこそこ大きな林があるの
って言っていたからだ。

ちなみにここの言葉はほとんど完璧といって言いぐらいだ。

・・・言い過ぎかな？

そこに入り（迷子対策のため目印は欠かせない）中ほどぐらいの
ところで足を止めた。

「ここら辺でいっかな・・・。」

独り言を呟きながら僕は荷物を降ろす。

前にお母さんが買ってくれていたバッグだ。

そして必要なものを取り出し地面に置く。

今の季節は秋なので枯葉がいっぱい落ちているのであまり汚れない。

持って来たものは練成陣を書いた紙、僕のいわゆる研究ノート、そ
してなぜかりんご。

おやつ的なノリでお母さんに渡された。

・・・別においしいし好きだからいいけどさあ。

一先ずりんごはバッグの中に入れておきしゃがんだままノートを開く。

僕は忘れないためと秘匿のためにすべて日本語で書いている。

これである国家錬金術師のエドワード・エルリックも解読できないって寸法さ。

標準語が英語であり更にシンの文字も読めなかったとなれば確実だ。

だけど、一番解読されそうなのがシンの国の人たちだ。

読まれることはないだろうが危険人物はリンとかいう細目だ。

けどまあ、気にすることもないはず。

アメストリス人に読まれなければそれでいい。

さて、そして僕はノートの見直しの後に近くで手ごろな木の枝を探した。

家からもってくれば早いんだけどここも一応林だからね。

そこで1本見つけたところで僕は地面の枯葉をどかしながらきれいに練成陣を書いていった。

何度か修正と書き直しの後、書き終えた練成陣を見直しどこか間違っていないかチェックする。

間違えてはいなかった。

そして僕はついに練成陣を発動させる準備を終えた。

緊張する。

だが、失敗を恐れていては始まらない。

ついに僕は頭の中でどんな風な「風」を発生させるかを考えた。

まず、無難に練成陣上に小さな竜巻を想像する。

そして、僕は練成陣に手をのせる。

すると、光が発生する。

練成反応だ。

光が治まる。

・・・失敗？

そう思った。

しかし、なんと周りの枯葉が練成陣の真ん中に寄ってくるではないか。

なんと成功していた。

初めての練成で成功した。

僕は嬉しくてたまらなかった。

だけど、その場で枯葉が集まってくるが嬉しくてその場にしゃがみじっと見ていた。

どうやら風の手度が遅かったため上ではなく横に伸びていた。

それでも風は発生した

それだけで成功といえる。

ただ、想像とちよつと違っていた。

なんでだろう。

そんなことを考えていたからだろうか。

僕は近くにいた人に気付かなかった。

その人物とは

「あの・・・そこで何しているんですか？」

！！びっくりした僕はすぐに立ち上がりそちらのほうに向いた。

するとそこには

「イッシュヴァール人・・・？」

イシユヴァール人の男の子がいた。

第8話 究（後書き）

がんばった。

僕がんばった。

なので寝ます。

超特急で寝ます。

ちなみに気圧に関してはほとんど偶然です。

ウィキで見つけました。

次話は第9話 種 かもしれませんね兄貴。もしくは姉貴。
突発性キヤラ変わり。

ここまで読んで頂きありがとうございました。

第9話 種（前書き）

わーい、来週テストだっていうのに更新しちゃうぜー。
・・・大丈夫かなあ。

第9話 種 です。どうぞ。

第9話 種

イシュヴァール人。

褐色の肌に赤い目を持ちイシュヴァラ教という宗教を崇拝する部族。武芸に秀でていて1人でアメストリス人の大人10人をなぎ倒す実力を持つ人が多く存在する。

そのイシュヴァール人が多く在住する土地がここ東部地方であり正確にはイシュヴァール地方と呼ばれる。

~~~~~

さて、ここで僕はどうか動くべきだろうか。

僕からあの子まで距離はあまり離れていない。

だからこそあの赤い目が見えたんだけど。

見た目は僕と年齢がそれほど変わらないと思う。

相手も僕が答えるまで動くつもりはないらしいのでとりあえず切り返してみる。

「君こそここに何をしに来たの？」

「ぼ、ぼくはよくここで遊んでいてその途中で何か音がしたからこ



ここまで来てみると、君がいたんだ。」

・・・声がか細くて聞き取り辛い。

けど、遊んでいてって言葉と音とか君とか言っているからどうやら彼は

「君はこの近くに住んでいるのかい？」

と聞くと

「！うん。うん。そ、そうだけど。・・・き、君はアメストリス人だよな？」

何で分かったの！みたいな反応してきたからこっちも驚いた。

近くじゃないならわざわざここまで遊びに来ている事になる。

しかし・・・

「そうだけど・・・何？」

「い、いや、別に何も・・・。」

なんか内気な子だね。

喋りにくい。

「僕は別に人種の違いに差別的な何かを思っているわけじゃあないよ。僕をそこらへんの馬鹿と一緒にしないでよね。」

「そ、そうなの？」

やっぱりそういうことで聞いてきたのか。

今はアメリ<sup>ス</sup>ストリス国と併合しているイシユヴァール地方だけど差別はあっているんだろうな。

世界が変われど差別という言葉が人種という言葉に付きまとうことに変わりはないんだろうね。

同じ人間だというのに。

「うん、そうだよ。ここであつたのも何かの縁だ。友達になつてくれないかな？」

「友……達？ い、いいの？ ぼくなんかと友達で……。」

「そう卑下することもないと思うよ？ 友達っていうのは人種に係わらずどんな人とでもなれるものだと思うてる。何より大切なのは心だよ。僕は心から君に聞いた。友達になつてくれる？ って。後は君がそれに応えてくれるかどうかだ。」

「……ほ、本当にいいの？」

「うん。」

「本当に？」

「うん。」

そして何かすご100点満点な笑顔になる目の前にいる男の子。

「それじゃあ、まず自己紹介といこうか。友達の第一歩だ。僕の名前はミクナって言うんだ。よろしく。」

「ぼ、ぼくはクルートって言うんだ。よ、よろしく。」

「うん、よろしく。」

そのままお互いに手を握り握手する。

この世界で始めて友達を作った瞬間だった。

しかし、前世では心も何もへったくれもなかったというのに今更なんて偽善的なことを言っているんだか。

まさに心にも無いことを言って申し訳ない気持ちでいっぱいだよ。

いっぱいいいっぱいだ。

だけど、嬉しいなあ。

将来、三十路になる事が決定付けられた仲間が増えるのは。

~~~~~

その後、時間も時間だったので（太陽の暮れ方で大体分かる）そのまま帰ることになった。

一週間後に会う約束をして。

ついでに家のりんごを1個クルートにあげた。

何かめっちゃ喜ばれた。

家に着くとすぐに練成陣の微調整を行いそのまま寝た。

そしてあれから1年後。

僕は4歳になった。

身長もお母さんの胸まで来るようになった。

お母さんはこのごろ「ミクナが構ってくれなくなった。」とか何とか言っていていじけているが放って置くとして今日も僕はあの林まで走っていくのだった。

ちなみにクルートもやはり同じ年だった。

僕は林に着くとクルートを探し始める。

どうやらクルートは秘密基地らしきものを作っていたらしく僕もそれを拝見させてもらった。

子供にしてはよく出来ているほうだと思う。

それでも風が吹くと不安になるぐらい揺れる。

安心設計ならぬ不安設計なんちゃって。

・・・・・・・・

そんなこんなで秘密基地までたどり着くとクルートを呼び始める。

が

「あれ・・・？今日じゃなかったっけ。」

秘密基地にいなかったため辺りを搜索していると

「あ、クルート。どうしたの？探したんだよ？」

「・・・・・・・・。。。」

「？どうしたの？」

「・・・・・・・・。。。」

「いっ。」

「ごめんね・・・・・・・・。。。」

「え？」

すると僕の後ろからイシユヴァール人の大人1人が仁王立ちしていた。

そしてその人は言う。

「お前がクルートの友達とやらか。」

とずいぶんダンディな声で話しかけてきた。

第9話 種（後書き）

あはははは。

この小説が何を目指して進んでいるのか僕にも分からないです。
原作に入れるかなあ。

僕も僕に期待することになります。

次話は第10話 友 かなあ。どうだろう。

ここまで読んで頂きありがとうございました。

第10話 友（前書き）

うっわー。

このごろ寒いですよねー。

夏の時は冬が恋しかったですけど冬になると夏になると夏が恋しいですよね。

第10話 友 です。どうぞ。

第10話 友

目の前のこの人の第一印象はやっぱり背がでかいの一言に尽きる。

僕がまだ4歳だからという理由もあるんだろうけどそれにしたってでかい。

お父さんよりもでかいかもしれない。

そんな目の前の巨人に対して（比喻表現（笑））僕は答える。

「そうですが、あなたは？」

僕の予想からするとこの人はクルートのお父さんと思われる。

何よりイシュヴァール人だし内気なクルートも怯えている様子もないしね。

「私はクルートの父だ。」

やっぱり。

「そしてクルートの友達だということはお前がミクナとやらか。」

「その通りですけど・・・クルートから聞いたんですか？」

「いや、まあ、そういうことになるのか。実際はクルートの方から言ってきたのだ。友達が出来たと嬉しそうに語っておった。」

チラッとクルートのほうを見ると顔を赤くしながら俯かせていた。

そんなに嬉しかったんだ。

「私も最初に聞いたときは嬉しかったのだ。友達が出来てからというものが毎日が楽しくて仕方がないといった感じだった。以前はあの性格ゆえにいつも独りであり外に行かなくなっておったからな。だが、その友達がまさかアメストリス人だとは思わなかった。人種を気にせず遊んでくれる人物という者が珍しくてしょうがなく私も一目見たくなってなあ。つい、ついに行ってしまった。すまん。」

なにやらぺらぺらと喋ってくれたけど結局はクルートをストーカーして来たってことになるんだろうね。

家族想いって言えば聞こえはいいんだろうけど想いが重過ぎては重荷にでしかないだろうね。

いわゆる僕と友達の遊びを邪魔するなーってやつだね。

でも少し気になる事が1つある。

「あなたたち家族の他に家族がいるんですか？」

「うん？ ああ、いるな。確か私達を含めて10世帯ほどか。そのぐらいはいるはずだ。」

「・・・素直に話すんですね。もしかしたら僕とクルートの友達という関係だって建前かもしれないよ？」

「・・・ふふ、私にだって人を見る目ぐらいはあるさ。なによりク

ルートが信じているというのに私が信じずにいてどうする。わっはっはっは。だいたいそんなことを言う奴が悪い奴な訳がないだろう？」

単純な・・・。

しかもなんて自分勝手な判断。

なんかお母さんの尻に敷かれてそんな人だなあ。

まあ、それはそれとして。

「この近くに集落を作っているんですか。」

「まあ、小規模ではあるがな。1人がみんなのためにみんなが1人のために！って感じでやっている。」

「でも、なぜわざわざここに作る必要があったんですか？イシユヴアール地方もそこまで離れてはいないはずですけど。」

「実はそのことだな。話があるのだ。」

「話・・・？」

「ああ。実は我等はある一定の場所に留まって生活しているわけではなく放浪しているのだ。」

「だから10世帯という人数の少なさで生活をしているんだ・・・。」

「その通り。少人数であれば移動も楽になる。ただ、荷物を持ち移動するというのがなかなか困難なのだな。そしてそのルールとして1年周期で移動をしている。」

という事は・・・

「もうすぐ1年目になる。ということと話したかったわけですか・・」

「そういうことだ。」

ここで僕はクルートのほうを向く。

クルートはもう今にも泣きそうな顔でこちらを見ていた。

「ミ・・・・ク・・・ナ・・・・。ぼくっ、ぼくっ」

「クルート。僕もね、友達がなくていつも家で1人だったんだ。」

實際は今の肉体的年齢で同年代に馴染めるとは思えなかったから。

「え
・
・
・
？」

「僕はクルートと友達になっていつも楽しかった。」

「ぼくもつ、ぼくも楽しかった！」

「かくれんぼだってしたし追いかけっこだってしたね。」

「うん。うん！」

「途中でクルートがこけたりして痛そうだったけど泣かなかったよね。」

「う、うん。」

恥ずかしそうにだけど嬉しそうに笑う。

「そんな笑顔も僕は眩しかった。嬉しいから笑う。楽しいから笑う。そんな君がうらやましかった。だけどね、痛かったら泣いて良いんだ。ぼくと君がお別れするのももうすぐだ。そんな感動的なお別れが涙なしではもったいない。」

「う・・・う・・・うわああああああああああん!!
あああああああああああつあつあああああ———」

「———」

号泣するクルート。

僕はそんな彼を抱きしめる。

しばらくして少し落ち着いたのを確認して僕は語る。

「だけど最後は笑いあって別れるんだ。またいつか出会えるって願いながら。そうすれば心も幸せになれる。」

「ううっ! ひっく、ひっく、うん、うん! また、また、いつかミクナと会えるよね?」

「もちろん。君が僕を忘れない限り僕も君を忘れることもない。だ

からまたいつかここで待ってるよ。」

「うん、うん、ありがとう、ありがとう、ぼくもいつかこの場所でミクナを待ってる。」

そう言って涙と鼻水で顔をぐしゃぐしゃにしながらも笑うクルート。

でも、やっぱり悲しみは拭えられずうめき声を上げ続けていた・・・。

~~~~~

結局、クルートはそのまま泣きつかれたのか眠ってしまった。

「いやゝ、なんて感動的な別れなんだ。うおゝゝゝい、おいおいおいおい！」

おっさんが泣き叫んでもうるさいだけで一切感動は伝わらないけど感情的であることは伝わった。

「ずずゝゝゝ！っは！んんっ！本当にお前がクルートの友達で良かった。子の幸せは親の喜びだからな。お前の親もさぞかしすばらしい人間なんだろう！」

ということは僕が幸せであればあの人たちは喜んでくれるんだろうか。

「そうだ。ついでだが良いことを教えてやろう。我等は5年に1度は故郷に帰ることにしている。ちょうど今年帰ることになる。そし

てそこで1年が経つとまた我等は旅をする。我等は最初に西部を目指して進むことにしている。だから残念ながらここは最後に通ることになるのだ。すまん。」

つまり彼が言いたいのは5年後にここで待っていればきつとまた会えると言いたいんだ。

「わかりました。ありがとうございます。その時には僕も10歳になりますか。先は長いですね。」

それから僕はクルートのお父さんとも別れた。

僕はそのまま家に帰ることになる。

僕は思う。

今はまだ『今は離れ離れになるけどいつかきつとまた会えるよ!』  
見たいな事を言えるけど僕の将来は決まっている。

この世界の未来さえ知っている。

知っているが故に僕は悲しい。

クルートだけでなく僕の親ですらいつか一生のお別れをしなければならぬのだから。

いずれ僕の成長は止まる。

そうすれば今の町に留まっておくわけにはいかない。

成長が止まる前に何が起こるかわからない。

この世界はそういう世界だ。

異世界はかっこいい。

異世界は秘密がいっぱいで楽しい。

とか夢見ても悲しいだけだ。

別れというものが悲しいとは思わない。

この世界の物語はそういう物語なのだから。

決まりきっている死を嘆いてもしょうがない。

それはそういう風になっていく“運命”なのだから。

だから僕は悲しくない

に。

はずなの



## 第10話 友（後書き）

僕は小説の完成度が低すぎて悲しい。

泣けてくる。

うえーん。

あはは。

後26年後に原作が始まります。

長いなあ（遠い目）

次話は第11話 教 だったら良いなあと思う今日この頃。  
ここまで読んで頂きありがとうございました。

## 第11話 教（前書き）

わーーーーー。

PVが65000にユニークが9000を超えましたー。

読んでくれている人がいるってだけで本当にうれしいです。

これからも頑張っていきたいと思っています。

第11話 教 です。どうぞ。

## 第11話 教

人が「悲しい」と思える時はいつだろうか。

大切にしていた物が無くなったとき？

好きだった憧れだった芸能人が何らかの事件を起こして捕まった時？

もしくは亡くなった時か？

かわいいペットが亡くなった時？

好きな彼女が亡くなった時？

好きな彼氏が亡くなった時？

家族が事件で捕まった時？

もしくは家族が亡くなった時？

だが、それらの関係者以外にとってはなんら係わりのない話に過ぎない。

人が物を無くしたり大切な人やペットが亡くなったり誰かをその手で殺めてしまったりしたとしても周りの人は他人でしかない。

赤の他人だ。

そこにある感情は決して「悲しい」ではなく「哀れみ」しかない。

だって、その人が何か出来るわけでもないのだから。

遠い国で未だ戦争があっていて困っている人達だっている。

発展途上で物資が間に合っていない国だってある。

病気が蔓延して次々に人が死んでいってしまっている国だってあるかもしれない。

医者とかそういう人なら助けてあげるために奮闘し結果的に助からなかった場合は悲しんであげられる。

だけど、一般人に出来ることといったら電話で救急車呼んで人任せにするか救急救命とか何とかしかする事がないだろう。

手伝ったところで悪化するだけ。

だから他人は傍観し「哀れむ」ことしか出来ないんだ。

当然、これらは僕の自論であり暴論でもあるだろう。

でも、だからこそ僕はこの世界に來た以上出来る限りのことはしていききたいと思っている。

僕は決して他人では終わらない。

終わらせたくはない。

この世界では錬金術という力がある。

その能力をも<sup>ち</sup>ってして何を成すべきか位僕にだって分かる。

そのためにも僕には力が必要なんだ。

~~~~~

クルートとの別れからももう1年が経ち僕も5歳になった。

早いのか遅いのかさっぱりだけど原作まで後25年と思うと遅いと感じる。

だけど焦ってはいけない。

あと25年も研究が続けられると思えばまだ気も楽になる。

楽になる・・・はず。

なのであの時からもう2年経った。

僕はついにお父さんに師事してもらうために部屋に向かったのだった。

「お父さん。」

「・・・ああ、何・・・ああなるほど。・・・あれからもう2年か。・・・早いものだ。」

お父さんは最初に僕が部屋に入ってきた事に疑問を持ったようだけ

ど僕が持つ本に気付き、すぐに理解したようだった。

僕が持つ本というところろん2年前に貰ったあの本だ。

今思うとあの時のこの本は結構新しかった気もする。

もしかするとわざわざ買っておいっていたのかもしれない。

「・・・とりあえず座れ。」

出してくれた椅子に座る。

足ももうすぐ着きそう。

「・・・本を貸してみろ。」

擦り切れ具合でも見るのだろうか。

「うん。はい。」

「・・・なかなか読み続けたようだな。・・・まあ、良いだろう。」

「本当？じゃあ・・・。」

「・・・ああ。・・・俺がお前に指示してやる。・・・今日から俺がお前の師匠だ。・・・いいな？」

「うん。分かった。リストレア師匠。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・／／／べ、別に師匠と呼ばなくてもいい。・・・」

・いつもどおりに接しろ。」

・・・なんかちょっと赤くなっている感じがしないでもない。

すごい目がうろたえてる感じがするし。

面白いなあ↑（確信犯）

「・・・と、とにかく一度テストをしよう。・・・石を砂鉄の塊と普通の石に分ける練成をしてもらう。・・・本は見てもいいが1回までだ。・・・チャンスは2回やる。」

そう言ってポケットから石を取り出してそこらへんにあったチョークと一緒に渡してきた。

床に書けて事かな。

本はもとより見る気はなかった。

このくらいなら出来る。

何の迷いもなく床にチョークを当てる。

そして慣れない円を綺麗に書いていき練成陣を書く。

その真ん中に石を置いて1回だけ深呼吸する。

すーすー、はーはー。

ここでリバウンドしたらどうなるか。

想像に難くない。

失敗は許されない。

とか何とか気難しいことは一切考えずさっさと練成してしまう。

練成反応を出した後に塊が2つ。

成功したようだった。

「ふーっ。」

そのまま床に座る。

「・・・ふむ、綺麗に出来ているな。・・・分離の練成はもはや完璧だな。・・・じゃあ、次だ。」

分離かあ。

石の中の砂鉄をすべて取り出す。

水と油を想像すれば難しくもない。

「次？」

「・・・ああ、次は物質の形をまた違う形に練成しなおす錬金術だ。・・・これをマスターすれば錬金術師と名乗っても遜色はないと思われる。」

「え？ そうなの？」

「・・・ああ、だが錬金術は奥が深い。・・・まだまだ学ぶことはいっぱいある。・・・この俺にだって分からない事はたくさんある。」

「へへ。たとえば？」

僕は興味本位で聞いてみた。

自分がすごいと思っている相手が分からない事があるなんていうと聞いてみたくなるのは当たり前だ。

だけど返ってきた答えはやはりというかなんと言うかでも結局はやっぱりと思う答え。

「・・・真理というものがいまいち分からない。・・・世の中のいろんな錬金術師でさえ説明されていない『謎』だ。・・・俺はいろんな人の研究の資料を解読し、漁ってきた。・・・だが、書いてあったことはまちまちだった。

・・・ある人は真理とはこの世の全てだ言い、

またある人はそれはこの世でたった一つしかないものだと言え、

そのまたある人はそれはこの世界だと発表し、

そのまたある人はそれは宇宙と呼べる存在だと書き残し、

更にそのまたある人はそれは全と一を創った神だと嘯き、

最後にある人は真理とは自分だったと言い残し死んで逝ったという。

・・・とそれが俺が調べた全てだったがお前にはまだ早かったな。
・・・さあ、外に出て勉強の続きだ。・・・どうした？・・・さっさと行くぞ。」

・・・お父さんがここまで長々と話したのは初めてだった。

ここまで調べてたんだ。

すごいよ、お父さん。

さすがと言える。

だからこそ危ないんだ。

『あれ』に近づけば近づくほど悪い奴等が動き出す。

使えると思われて連れて行かれるかもしれない。

イシユヴァール殲滅戦はまだ始まってすらいないのだから。

第11話 教（後書き）

当然僕は他人ではいたくありません。

けど、僕に他人じゃなくなるだけの力というものがありません。

だからこそ僕はどうすればいいか考えます。

偽善でもやったほうが前には進めますよね。

次話は第12話 遭・・・誰に遭うかは言いません。誰でしょうねー。

ここまで読んで頂きありがとうございました。

第12話 遭（前書き）

昨日何かアクセス件数が急に増えて何でだろうとか思っていたらランキングに載っていたからというコメントをもらいまさかと思いがらもランキングを見ると

確かに載ってた。

びっくりした。

というか1日でPVの半分以上を占めちゃったのもびっくりしました。どわー。

第12話 遭 です。どうぞ。

第12話 遭

僕はお父さんとの錬金術の修行を1ヶ月ほど続けてその修行の休みの日。

僕はウイントスの町にアルバイトに行っていた。

僕ももう5歳になり結構体力も付いてきて重い荷物も危なげながら運べるようになってきた。

毎日の筋トレは欠かしてない。

今はまだ腕立て伏せ100回と腹筋100回と柔軟体操をお風呂上りにやっている。

こういうときに筋力が上がってきたことを実感できる。

うれしいことだ。

僕は店に行きおじさんに挨拶すると頑張れよ的な話を話して店を出る。

この町にも列車は通っていてそれなりに観光客らしき人も来ているようだ。

その列車からあのお店への商品も運ばれてくる。

そこからトラックみたいな車に積んで運ぶんだけどあのお店までは運べず途中からは自分たちの手で運ばなくてはならずこれが結構疲

れる。

商店街っぽくなっていて店がいっぱい並んでいるんだけど歩いている人もいっぱいいてその人達をうまく避けながら運ばないといけないわけだ。

滑車付きの荷台でもあれば良いけど人にぶつかった時の事を考えると止めた方がいいたらうとなったらしい。

前に来た話だけど。

しかも1往復だけではなく1日に平均して3回、多いときには5回以上運ぶことになるらしい。

その前に僕の体力は尽きることになるので参加は出来なくなるけど。とか何とか考えているうちに駅までついたのでいつも一緒に荷物を運んでいる人達を探す。

いつも通りの場所でいつものようにくつろいでいる少し近寄りがたい温度を発している空間を発見する。

「おう！坊主、やっと来たか！後10分ぐらいすると列車が到着するぞ。」

どうやら僕が最後だったようで挨拶もそこそこにして列車の到着を待つおっさん5人と5歳の子供1人。

傍から見れば僕がここにいることに疑問を覚えるはずだ。

覚えない人は逆におかしい。

するとどうやら列車が到着したようでおっさん達が少しレールに近づく。

僕は危ないので動かない。

吹き飛ばされそうになる。

ありえないけど。

そして列車が完全に停止したところで貨物列車の入り口が開かれる。

中からこちらのおっさんと引けを取らないほどのおっさんが出てくる。

少し話をした後荷物を流れ作業で運ぶことになる。

1人がまず受け取り2人目に渡し4人目まで続くと今度は僕に渡される。

僕は車側から受け取り車に積み込む人に渡す。

——10分後——

荷物を降ろし終えたようでおっさん達がこちらに向かってくる4人のおっさん達。

・・・近寄りたくない。

そうこうしている内に荷物の積み込みは終わり商店街前まで車を走らせる。

そして歩行者をすり抜けお店まで荷物を運び終わると1回目の荷物運びは終了した。

「ふはあああああ。」

もう昼時になっていたので昼ご飯を食べる。

お母さんの手作りだ。

料理は前世でも作っていたので全然出来るけど5歳児が急に料理なんて作ったら驚かれるに決まっている。

お昼ご飯も食べ終わり食後におっさんから貰ったりんごを食べながらボーっと空を見上げる。

時折、涼しい風が吹きぬける。

もうすぐ夏になるので少々太陽が照っていて暑く感じる。

ちなみに僕は今駅にあるベンチに座っている。

昼時は人が少なくてゆったり出来る。

次の仕事は2時からだ。

今の時間は12時。

つまり今の僕は暇人だった。

「・・・平和だなあ・・・。」

今のこの世界の世の中を顧みて思えること。

平和だと感じる事が出来る瞬間というのは大切だと思う。

とか思っていると次の列車が到着したらしかった。

車輪の少し耳障りな音がする。

ボーっとしていたから今の今まで列車が近づいていたことに気付かなかった。

その列車から数人の乗客が降りてくる。

この町にも2，3件だけで小規模な宿ぐらいはある。

ある1人の男性が降りてきたのが目に入った。

その人は金髪で髪を伸ばして後ろで括っについて

身長が高く眼鏡をしていてひげを生やし見た目ライオンのような人でとても500年は生きているとは思えない風貌。

そう、僕の記憶が正しければその人は・・・

ヴァン・ホーエンハイム！

第12話 遭（後書き）

結局この人になりました。

別にロイ・マスタングを出してもよかったんですけどねえ・・・。
話が広がらないんじゃないかと思ってやめました。
すみません。

次話は第13話 丹 です。よろしく。

ここまで読んで頂きありがとうございました。

第13話 離（前書き）

明日、テストがあります。
どうしよう。

進級できるかなあ・・・。

さておき

丹は次話になってしまいました。
すみません。

第13話 離 です。どうぞ。

第13話 離

ヴァン・ホーエンハイム。

出生は約500年前に栄えたクセルクセスという国の一奴隷に過ぎなかった。

奴隷の毎日を過ごしている間に1つの生命体に出会う。

それが“ホムンクルスフラスコの中の小人”と呼ばれる存在に出会ってしまった。

その生命体はその国の皇帝を不老不死にするという目的で生み出された存在に過ぎなかった。

だけど馬鹿なその人達は逆に利用されクセルクセスの国民を全て賢者の石にされてしまう。

それに巻き込まれたホーエンハイムは分け与えられた賢者の石の効果によって不老不死になってしまう。

そして長い時を経ていろいろなあらゆる場所を渡り歩き自分より後に生まれた人が先に死んでいくというのを何回も見ている。

だからこそ怖かったのかもしれない。

エドワードたちが先に逝ってしまうという未来が。

そんな見え透いた未来が怖かったのかもしれない。

~~~~~

とかそんなのに僕は興味は無い。

僕が今あの人に魅力を感じているのはもちろん鍊丹術の知識だ。

なぜかは当然決まっている。

将来、『お父様』という存在と戦う上で1番回避すべきなのが鍊金術封じだ。

たとえば賢者の石を持っていたとしても発動するかは分からない。

何より気の流れを用いた遠隔操作も便利そうだしね。

でも、今1番問題なのはどうやってそんなことを聞けるかになってくる。

今は僕は5歳であり僕が本当は（精神年齢が）20歳を超えていることなんて話せるわけも無い。

どうしよう・・・。

なんて考えていると今まで日向にいた僕に影が差した。

「おい、君。ちょっと聞きたい事があるんだけど。」

「うわああっ！」

「おっと、大丈夫かい？ すまんね、急に話しかけてしまつて。」

「い、いえ……。」

びっくりした！。

急に話しかけてくるんだもん。

というか話しかけてくるとは思いもよらなかったからね。

「そ、それでおじさんは何の用なの？」

子供の振り、子供の振り。

「ああ、いや、この町に住んでいる人で探している人がいるんだが君はこの町の子かな？」

「ああ、うん。そうだよ。」

「それはよかった。」

「それで？ 誰を探しているの？ 力になるよ？」

「そうか。ええと、じゃあね、こんな名前の人を知っているかい？」

忘れていたのか紙に書いてある探し人と思われる人物の名前を読む。

その名前は

「リストレア・パステイクル？」

「ああ、そうだよ。」

「僕のお父さんに用事があるの?」

「えっ?」

~~~~~

僕がホーエンハイムさんの探し人リストレア・パスティクルの息子だということに驚いていたようだったけどすぐに平静を取り戻して連れて行ってくれるかという要望に僕は良いよと返したけどまだ仕事もまだあったのでこの町を見て回っていてもらうことにした。

そこまで何かすごいものがあるわけではないけど風がよく吹くので風車が売ってある。

1軒だけだね。

それから1時間後待ち合わせをしていた商店街前で合流すると僕はホーエンハイムさんを連れて自分の家へと向かった。

家に着きドアを開けると

何やらそわそわしていて不審者っぽくなっているお父さんを見つけた。

「お父さん・・・?何やっているの?」

「・・・ん？・・・ミクナか。・・・帰ったのか。・・・リアはキッチンにいるから早く帰ったことを伝えに・・・あっ！」

落ち着きが無い感じでしゃべるお父さん。

しかし、後ろからホーエンハイムさんが玄関に顔を出したことで顔が一変する。

何やら子供みたいな明るい感じの顔。

そして自分の欲しいものがまるで目の前にあるかのような反応だ。

「・・・リア、客だ。・・・コーヒーを持ってきてくれ。」

奥からお母さんのはーい、という元気な声が聞こえる。

「・・・じゃ、こちらに。」

「ああ、お邪魔させてもらうよ。」

やっぱり、お父さんは・・・。

僕はそのまま自分の部屋へ向かおうと思ったがキッチンに向かう。

「お母さん、僕が運ぶよ。」

「あら、そう？じゃあ、お願いしようかな。」

はい、とコーヒーの入ったカップを載せたトレイが渡される。

持って行った時の会話を聞かせてもらおうという魂胆だ。

「落とさないようにねー。」

落とすわけが無い事位お母さんは分かっているが分かった上で言っているんだ。

性質が悪い。

そしてお父さん達のいる部屋までたどり着くと部屋をノックする。

「・・・ああ。」

「お父さん持って来たよー。」

「・・・ミクナか。・・・ありがとう。」

カップをそれぞれ2人の前に置く。

一瞬、ホーエンハイムさんの方から羨ましそうな視線が来たがスルーした。

そのまま、部屋を出た僕はまずキッチンまで戻りトレイをお母さんに渡し抜き足差し足で部屋の前まで戻る。

そっと耳をドアに付けて聞き耳を立てる。

「・・・。」

何も・・・聞こえない。

お父さんの声が聞こえたのに聞き耳を立てて聞こえないということは会話をしていないかもしれないもしくは会話を終えているかのどちらかだ。
何の収穫もなさそうなのでそのままそつと部屋から離れる。

数分後、自分の部屋に戻った僕はお父さんの部屋から誰かが出てくる音を聞いた。

どうしたのか気になったので部屋から出てみる。

キッチンの方から声が聞こえたので行ってみるとお父さんとお母さんとホーエンハイムさんがいた。

「どうしたの？」

「・・・ミクナ、お前を1時期この人に預けることにした。」

「え・・・。な、何で？」

「・・・もう、俺からお前に教えてやれる事がほとんど残っていないんだ。」

「え・・・そんな。お父さんが僕の師匠になってくれるんじゃないかっただの？」

「・・・彼は臨時講師ということになる。・・・ミクナ、この世には錬金術だけではなくいろいろな興味深いものがたくさんある。」

「それは錬丹術という技術だ。」

「・・・そういうことでだな。・・・2年間だけ預かってもらうことになっている。・・・聡明なお前だ。・・・寂しくは無いはずだ。・・・頑張ってこいよ。」

「う、うん。」

「・・・本当に良いのかい？」

「・・・ああ。」

「そうか・・・。」

その後は迅速だった。

少しの服と下着、肌着、あの錬金術の本、僕の研究ノートと風の錬成陣をノートに挟んでバッグに詰め込む。

そして外に出るとホーエンハイムさんが待っていた。

そのまま近寄って振り返ると

お父さんとお母さんが立っていた。

「・・・行って来い。」

「行ってらっしゃい。」

2人は笑顔だった。

「行ってきます。」

僕も笑顔で応える。

そして僕とホーエンハイムさんは町の駅に向かって歩いていく。

「良い家族を持ったな。」

「・・・はい。」

後には涙を流す女の人とその人を胸に抱く男の人がいた。

第13話 離（後書き）

サブタイトルが予告したのと変わってしまったって本当にすみません。
リゼンブルに行くことになったちゃった。
どうしよう。

まあ、いっか。

次話こそ第14話 丹 だと思っています。
ここまで読んで頂きありがとうございました。

第14話 丹（前書き）

テスト。

それは学生にとって地獄の言葉。
僕にとっては。

第14話 丹 です。どうぞ。

第14話 丹

僕は隣で立っているホーエンハイムさんと一緒に列車が来るのを待っている。

沈黙が続くものだから僕はたまらず話しかける。

「ねえねえ、今からどこの町に行くの？」

傍から見れば仲のよさそうな親子のような雰囲気。

僕は空元気を出して無理に元気を出しているような子供を演じる。

それが徒になるとは。

「・・・無理にそう話そうとしなくてもいいんだぞ。」

「え？」

「君のその喋り方が本当の喋り方ではないこと位分かっている。」

「な、何言ってるの？」

「そして君の年齢が本当は5歳なんかじゃないことだって俺は薄々気付いている。」

「・・・！」

「リストのほうは気付いていなかったようだがな・・・。安心しろ。」

彼には伝えてはいない。」

もう、、誤魔化せそうにないね……。

その時、列車が駅に到着した。

~~~~~

「あなたの言う通りです。ホーエンハイムさん。僕の年齢は本当は5歳なんかじゃないです。」

「すると君の実年齢はいったいくつなんだ？」

「今の僕は……大体20歳位ですね。……なんで分かったんですか？」

「俺は最初から違和感を覚えていた。君に話しかけた時、まるで俺は何人もの君に一齐に話しかけているような錯覚をだ。その時点で君がただの人間じゃないことも分かった。」

「なぜそのような錯覚を？」

「鍊丹術は気の流れを利用し発動される。そのため気の流れを読めなくては鍊丹術は発動することはない。その気の流れはあらゆるものに流れている。生物や大地、大気中にだって気の流れは存在する。だから、遠隔操作だって可能になる。気の流れを読むというのは気配を読むといっても良い。そのため、人の気配には敏感だ。なので、医療にも長けているのだ。」



「つまり……。」

「1つの場所に複数の存在が一箇所に集まっていたらおかしいと感じるだろう?」

「なるほど。」

「ただホーエンハイムさんは違和感を覚える程度しか気配を探れないのか。」

「だから気になるんだ。あの違和感が。どうして君が何人もいるように感じてしまうのか。教えてはくれないか。」

「……。」

「話すことは出来ないか……。」

僕は黙って頷く。

「まあ、いいだろう。俺も訳アリだ。問い詰めたりはしないさ。」

「そうですか……。」

そこで話を打ち切った。

「ところでこの列車でどこまで行くんですか?」

「俺の家がある町までだ。」

確かにゼンブルだったはず。

けど知らない振りをしないといけない。

「へえ、どこなんですか？」

「リゼンブルという町だ。みんな優しくていいところだ。気に入ってもらえるとうれしい。」

その2、3分後、駅に着いてホーエンハイムさんが降りるぞと言ったので荷物を掴む。

そして列車から降りるとウィントスの町とはまた違う匂いを感じた。

やっぱり違うところに行くところがるで異世界のように感じる（笑）

どこかのどかの様でも活気にあふれていた。

大人は笑顔でみんなと道端で話し合ったり仕事をしている人も活き活きとしている。

子供もあちこちを走り回り今にもこけそうなぐらい活発だ。

子供は風の子ってね。

駅の前に工場らしきものが見え近くで羊を飼っている人もいた。

「それで、家はどこにあるんですか？」

「ああ。今はピナコという家に居候させてもらっているんだ。だか

ら俺の家があるわけではない。」

あの家はトリシャさんと暮らす上でピナコさんにずっと迷惑掛けるわけにもいかないからという理由から造られたんだろうね。

しかし、今は25年前。

ピナコさんの姿が想像できない。

「あの、ピナコさんという方はどういう人なんですか？」

「ん？ ああ。とても優しい人でな飯もうまいんだ。ピナコも今年で40になったはずだ。」

「へえ、そうなんですか。」

ここで僕がこの人に年を聞くとどういう反応をするだろうか。

気になる。

けど、あえてしない。

「楽しみです。」

「……。」

少し不思議に思ったようだけど意図を察したのかそのまま黙々と歩き始めた。

しばらくして1つの民家に着く。

2階建ての普通の家だった。

「ここ？」

「ああ、ここだ。」

そしてドアに近づきそのまま開ける。

「ピナコ。いるか？」

家の中に向かって言い放つホーエンハイムさん。

少し静寂がありすぐに誰かが走ってくる音がする。

走ってくる音がする？

ピナコさんは40歳のはずじゃあ・・・。

「あ！ホーエンハイムさんお帰りなさい！」

「ああ、ユーリか。ただいま。」

「母さん！ホーエンハイムさんが帰ってきたよ！」

ユーリ・・・。

ああ、ピナコさんの息子の。

元気があって騒がしいぐらいだ。

「おお、ホーエンハイム帰ったのかい。お帰り。・・・おや？そっちの子は・・・。」

「ああ、ピナコただいま。こっちはリストの息子のミクナだ。」

「初めまして！ミクナ・パステイクルって言います！よろしく願います！」

「リストの息子かい！ほー、元気だね。」

「2年間だけ預かることになった。」

「そうかい、そうかい。ようこそ。ロックベル家へ。」

そのまま家の中に入ることになった。

けど、すごい周りにオートメールがある。

すごい数だね。

これ全部ピナコさんが作ったんだろうか。

そんなことを思っているとユーリ君が近づいてきた。

「初めまして。僕はユーリ・ロックベルって言うんだ。よろしく。」

「よろしく！ユーリ君！」

そして僕の寢床の話になったけど急だったので寝るところをどうす

るか決まらない。

ホーエンハイムさんはソファで寝てるらしいし。

とその時

「じゃあ、僕の部屋で寝るといいよ。」

と言うことだったのでお言葉に甘えさせてもらった。

僕がユーリ君に部屋まで案内してもらいそのままピナコさんに呼ばれて部屋を出て行った。

荷物を置いていると

「・・・君はなかなか変わり身が早いな。」

「褒めても何も出ませんよ。」

「褒めてるつもりはないが・・・。」

出て行く気配がないのでホーエンハイムさんのほうを向くと

「まだ何か用があるんですか？」

「ああ。鍊丹術の修行についてだが今日はゆっくり休んでもらうことにした。環境が変わるんだ。ストレスも溜まりやすいだろう。」

「そうですね。分かりました。」

ということでは今日はピナコさんのお手製料理を食べてユーリ君と一緒に風呂に入るとすぐに寝てしまった。

ピナコさんの料理は本当においしかった。

## 第14話 丹（後書き）

クオリティーが下がってきている気がする。  
テストで気が滅入っているのかな。

明日で忌々しい3日間も終わりを告げる。  
うれしいことだ。

次話は第15話 修 なのかなー。どうかなー。  
ここまで読んで頂きありがとうございました。



## 第15話 修（前書き）

戦争が・・・終わった。

もちろん比喻です。

何が言いたかったのかって？

テストのことに決まっているじゃないですか。

第15話 修 です。どうぞ。

## 第15話 修

次の日。

僕は朝6時頃に起きた。

朝6時頃起きはもはや習慣になっている。

僕はまだ寝ているユーリ君を起こさないように部屋から出る。

キッチンに入るとテーブルのいすに座って新聞を読むホーエンハイムさんと朝ご飯を作っているピナコさんがいた。

「おはようございます。」

「ん？おはよう。」

「ああ、おはよう。起きるの早いだねえ。」

「あ、あはは。洗面所ってどこー？」

薄く苦笑しながら洗面所に顔を洗いに行つてトイレを済ませるとキッチンに戻った。

そしてテーブルに着こうとすると

「ミクナ、ちょっとユーリを起こしに行つてくれないかい？」

と言われた。

学校があるらしい。

僕はユーリ君の部屋に向かうとまだ寝ているユーリを叩き起こした。  
叩いてはいないけど。

寝ぼけているユーリ君を引っ張ってトイレに無理矢理ぶち込んでキツチンに戻る。

するともう朝ご飯が出来上がっていたのかホーエンハイムさんが食べ始めていた。

恨めしい視線を送りながらテーブルに着く。

「ありがとうね。はい。どうぞ。」

「ありがとうございます。」

ピナコさんのおいしい料理を頂いているとユーリ君が部屋に入ってきた。

「おはよー。母さん。」

「はい、おはよう。それと、挨拶するのは私にだけじゃないよ。」

「え？あ！お、おはよう。ミクナ。ホーエンハイムさんも。」

「うん。おはよう。」

「おはよう。」

まだ寝ぼけていたようだったけどピナコさんの叱責で完全に目が覚めたようだった。

「まったく……。ミクナを見習うんだねえ。」

「ご、ごめんなさい。」

そして席に着くとピナコさんが朝ご飯を僕とユーリ君の分を持ってきた。

「ありがとうございます。」

「ありがとう。母さん。」

「ユーリは急いで食べるんだよ。学校に遅れるからね。」

「はい。」

隣で早く食べてるユーリ君を横目に僕はゆっくりと食べ進める。

僕は基本マイペースだ。

周りに合わせる事がない。

ご飯を食べ終わると服を着替えに部屋に戻っていくユーリ君。

やはり、小中高で制服が基本だったため私服で学校に行くというのは少し違和感が残る。

その後、学校に向かって登校していくユーリ君を家の前で見送って  
家の中に入ろうとすると

「おーい、ミクナ。」

横から知っている声が聞こえたので向いてみると

チヨイチヨイ

とホーエンハイムさんが手でカモンと言ってきた。

~~~~~

「早速、今から君に錬丹術を教えようと思う。」

「ここで、ですか。」

「そうだ。」

「ですが、僕は錬丹術がどのように発動するのか分かりませんが。」

何かを創る時、発動する時は想像が大事だ。

「いや、まず君にはやってもらおう事がある。」

「え?。」

「錬丹術を使う上で1番重要なことを覚えているか。」

「えっと、生物や大地などに存在する気の流れを読めるようになること、でしたね。」

「そうだ。だから、まず君にはそれが出来るようになってもらわなければ話にならない。」

そっか。

列車の中でも言ってたっけ。

でも・・・

「でも、どうやったらできるようになるんですか？」

「これに関しては努力するしかないとした俺からは言えない。」

「えー。ー。」

「えー、と言われてもどうしようもない。理論的に証明できるわけではない。だが、君は錬金術を使えるはずだ。その過程で君は『一の中の全、全の中の一』を理解しているのなら、そう難しい話ではないはずだ。」

「感覚で覚えろということですか。」

「まあ、そういうことだ。それが1番難しい最初の難関だ。」

じゃ。とそのまま僕を置いて家の中に戻ろうとするホーエンハイムさん。

あんなこと言われたって僕にどうしろっていうんだ。

とりあえず、よくありそうな精神集中してゝみたいなノリで座禅を組んでみることにした。

胡坐をかいて手を膝の上に置いて目を閉じる。

まず、僕の考えとしてはシン国のあの3人はホムンクルスに出会った時“目に見えて存在しているのは1人だけなのにまるで目の前に何人もの人が集まっているように感じている”はずだ。

ホーエンハイムさんはたしかあの時“まるで俺は何人もの君に一斉に話しかけているような錯覚”があると言っていた。

なら、僕が気及び気配を感じる事が出来るためには僕の内にある複数の“僕”を感じ取れるようになれば良いんじゃないかって思う。

~~~~~

1時間後 (8時)

~~~~~

2時間後 (9時)

~~~~~

3時間後 (10時)

~~~~~

5時間後 (12時)

お昼ご飯を頂く。

~~~~~

6時間後 (13時)

ユーリ君が帰ってくる。

~~~~~

7時間後 (14時)

目をつぶっていた為、静かに近づいてきたユーリ君に気付かずそのまま続ける。

早送り~~~~~

夜中だ。

真っ暗闇だ。

1日中目を閉じていたため光が以上に眩しい。
くらくらする。

僕はその日、さっさと寝てしまった。

第15話 修（後書き）

こんな毎日はいやだ。

と思った。

テストも終わり羽を伸ばそうと思い明日は遊びます。

家の中で。

あはは。

次話は第16話 気 かな？ かな？ かな？

ここまで読んで頂きありがとうございました。

第16話 気（前書き）

今日、僕はけいおんの映画を見に行きました。
最高でした。

面白いですよ〜。

第16話 気 です。どうぞ。

第16話 気

あれから、既に2ヵ月が過ぎた。

過ぎてしまった。

こんな調子で大丈夫なのかな。

そんなことを思っただけでホーエンハイムさんに話すと

「大丈夫さ。そんな簡単なことじゃないからな。」

「そりゃあ、そうでしょうね。理論的であればまだ話は早かったんですけど理解することも出来ずにただ感覚だけで覚えるというのは無謀でしょう。」

「まあ、そうだろうな。理解があれば後はそれを深めるだけだ。考えることでそれは成せる事だ。だが、感覚というのはその通りに感じることを覚える事が出来ればそれを体に馴染ませればいい。」

「それが出来れば苦労はしません。」

「そうだな……。じゃあ、少しヒントを与えてやる。」

「ヒント？」

「ああ。俺が錬丹術を使う上でいつも思っていることだ。」

「それは、どんなことを？」

「まあ、待て。結論を聞いたところで理解できるとは思えない。いか？・・・まず、なぜ『一の中の全、全の中の一』が存在するかは分かっているか？」

「？愚問ですね。この世界というものが「全」でありそれを形作っているのが「一」で、「全」があるから「一」があり「一」があるから「全」がある、ということですよ。理解はしていますが・・・」

「違う。俺が言いたいのはそういうことじゃなく、それはただの『一の中の全、全の中の一』という言葉の意味を理解したということだけのことだ。質問を変えよう。ならば、一があり全がある？全があつて一がある？なぜだ？」

「それは・・・。」

「それは？」

それは簡単な話だ。

「人は生きているものだから。」

「・・・正解だ。」

そして、ホーエンハイムさんはふつ、と柔らかく微笑む。

「そこに例外はない。動物であろうと、植物であろうと、無機物であろうと、空気であろうと、化物であろうとも・・・な。」

「……」

化物であろうともそこに存在する限り「一」であることに変わりはない。

僕も化物と呼べる存在だ。

僕が死ぬだけで辺りがすべて消し飛ぶことになるんだから。

化物と呼ばずに何と呼ぶ。

「まあ、俺が言いたいのはそれだけだ。じゃあな。」

つまり、ホーエンハイムさんが言いたいことは……化物であつても生きているということを言いたいのか。

そして、気というものは生命力であると。

今の僕の中には僕が将来、転生し生きていくはずだった寿命のようなものと呼べる生命エネルギーが存在する。

原作でホーエンハイムさんが賢者の石になっても人として接し、語りかけたように、僕もそれを真似してみるのも手なのかもしれない。

僕はいつか感じ取れるだろうと言う考えの下で今までじっとしてきた。

その言葉通り、毎日何も考えずにただひたすら座り続けた。

それだけじゃだめだったんだ。

僕が近寄って感じ取らないといけないんだ。

そこからなんだ。

という訳で、精神に集中してみる。

自分の中に何かないかと探ってみる。

そして――――

僕はいつか見たあの空間に漂っていた。

~~~~~

『よう、久しぶりだな。とは言え、久しぶりなんてオレは言ったが実際はこの空間とオレに時間という概念はありはしないんだがな。君の記憶からしてそう答えるに値すると判断したからだ。しかし、まあ、こんなに早く会う事になるとは思わなかったぜ。どうしたんだい。鳩が豆鉄砲を食らった様な顔をして。そんなにオレに会えたのがうれしかったのか？安心しろよ。君だけじゃない。オレだって喜んでいるんだぜ？わざわざオレがこんなに長々と話してやっているんだ。感謝しろよ？こんなに優しいオレもなかなかいないんだぜ？』

と、いきなりまくし立ててきた『奴』。

一瞬どころか瞬きを忘れるほど僕は唾然としていた。

何で僕がここにいいのか。

そんな疑問しか自分の頭は考えてくれない。

そんな頭を振り切るように僕は『奴』に聞く。

「何で・・・僕はここにいいのか？」

『？何を言っているんだい？オレは最後に言った筈だぜ？“別に会おうと思えばいつでも会える”と。忘れたわけじゃあないだろ。』

「それはそうだけど・・・。問題は何が原因でここに来たのかが知りたいんだ。」

『んん？君は望んでここに来たんじゃないのか？』

「違うよ。僕はただ自分の中にある生命エネルギーを知ろうと思っ  
て自分の中に集中したら・・・。」

『ここに来ちゃったって訳か。』

「そうだよ。」

『だが、何でまたそんなことをしているんだ？』

「鍊丹術って知ってる？」

『ああ、なるほど。そのためにか。』

「そうだよ。」



『それでも意味はないと思うが……。』

「え？どういう意味さ。」

『君は最初に自分の中にある生命エネルギーを、とか言ったが知  
ることは出来ないはずだぜ。』

「ど、どうということ？」

『君の体と生命エネルギーはイコールでつながっているからな。君  
の中にある、という考えは勘違いだ。』

「そんな……。」

『なにより、鍊丹術は気の流れのエネルギーを利用し発動する技術  
だったはずだ。そのために気というものを感知取る必要があったは  
ずだな。』

「う、うん。」

『なら、もっと無理だな。大体、君の体の生命エネルギーが邪魔し  
て気なんか感じるはずもない。』

「……。」

じゃあ、僕に鍊丹術の習得は不可能、か。

『ただ、まあ、方法がないわけでもない。』

「  
・  
・  
・  
え?  
」

## 第16話 気（後書き）

なんかもう訳わかんなくなってきました。

もともと原作でも錬丹術についても何か載っているわけでもないですしね。

僕の頭ではこれが限界ですね。

けいおん！・・・。

僕はこの物語の二次創作を創るとしたらこんな設定とかどうだろう。なんて考えていてけいおん！も考えたりしていました。

書けるだけの文才があるわけでもないですし原作の設定は詳しくないですしアニメしか見てないですし・・・。

まあ、その前にこの小説を完結まで持っていくだけで精一杯ですけど。

次話は第17話 化 です。がおく。

ここまで読んで頂いてありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4896x/>

---

風の錬金術師

2011年12月3日21時47分発行